

高知県香美郡土佐山田町

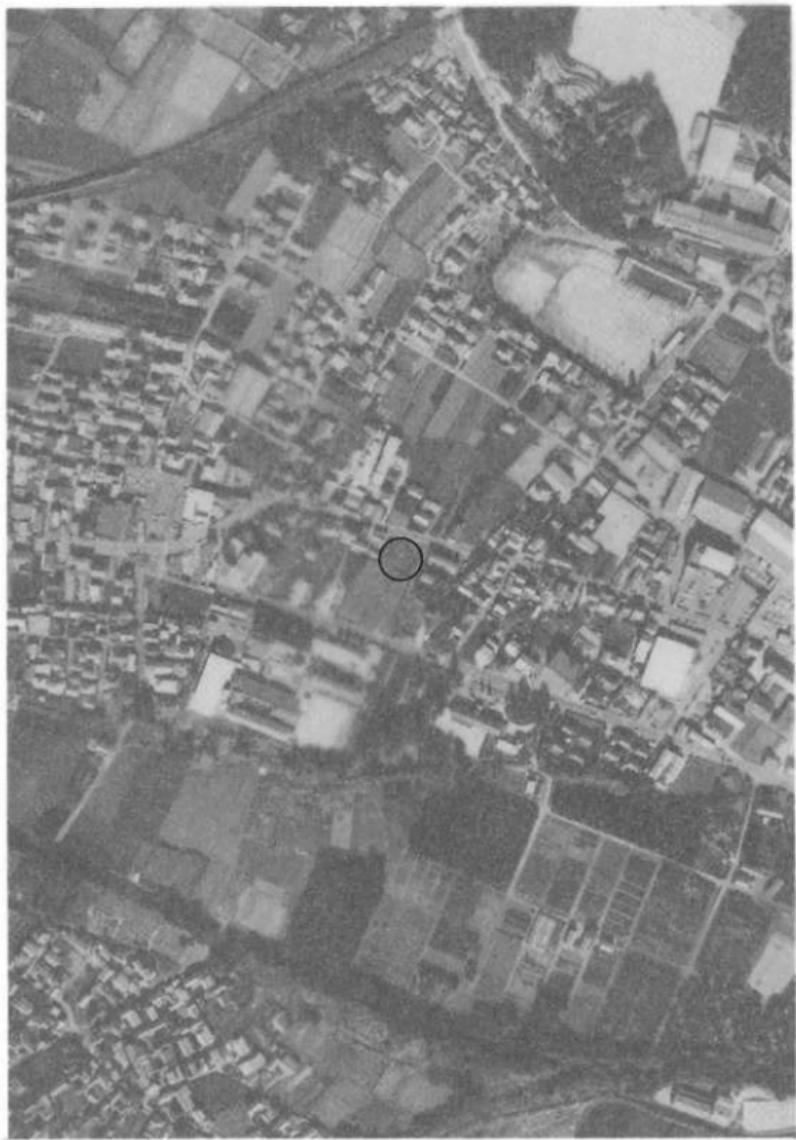
大塚遺跡発掘調査報告書

OTSUKA

—個人宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1991年3月

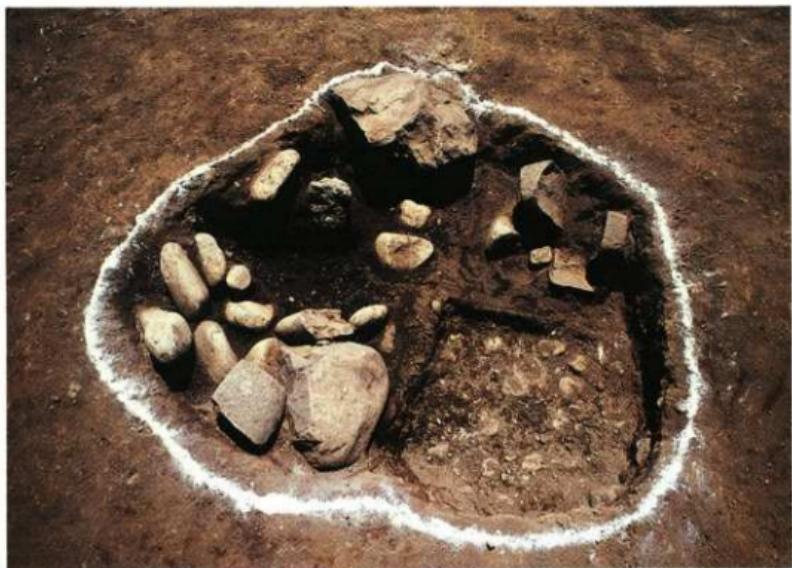
土佐山田町教育委員会



大塚遺跡周辺航空写真



大坂遺跡周辺航空写真



SK 51 (北より)



SK 53 土師質土器出土状況

序

土佐山田町は埋蔵文化財の宝庫といつてもよい程数多くの遺跡が埋存しています。これまでに縄文時代から弥生、古墳、奈良、平安…と各期にわたる各種の遺構、遺物が発見されております。

これらの埋蔵文化財は、我々の遠い祖先が残してくれた貴重な文化遺産であり、先人達が培ってきた英知の結晶であり、これを土台として現在の文化の隆盛があるといつても決して過言ではありません。

しかしながら近年、宅地の増加とそれに伴う道路等が整備され、市街化が著しく進むなかで、埋蔵文化財の現状保存は困難な状態になってきております。

今回、本調査におきましても埋蔵文化財の現状保存が不可能なことから出来うる限り記録保存による調査を実施しました。

本書に収録されたこれらの資料が永く保存され、教育および学術研究において役立つとともに、年々失なわれつつある埋蔵文化財について、なお一層の御理解と御協力を願うものであります。

最後に、この発掘調査にあたり種々御配慮、御協力いただきました関係各位に対しまして、ここに厚く御礼申しあげます。

平成3年3月

土佐山田町教育委員会

教育長 岡 本 章 博

例　　言

1. 本書は、個人宅地造成工事に伴う大塚遺跡の発掘調査報告書である。
2. 大塚遺跡の所在地は、高知県香美郡土佐山田町百石町2丁目である。
3. 調査は、土佐山田町教育委員会が実施し、山本哲也（財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター開設準備室事業課調査係長）・曾我貴行（財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター開設準備室事業課調査員）が調査に当った。調査事務は、吉村泰典（土佐山田町教育委員会社会教育課係長）・中山泰弘（土佐山田町教育委員会社会教育課主事）が行った。
4. 本書の執筆は、付録1を山本が、それ以外の部分を曾我が担当し、編集した。
5. 遺構については、ST（竪穴住居・竪穴状遺構）、SD（溝）、SK（土壤）、P（ピット・柱穴）で標示し、遺構番号は「ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書」との重複を避け、それぞれST21～、SD30～、SK50～、SX1～、P2000～と開始番号を設定し、それによって遺構番号をつけている。
6. 出土遺物の図版番号及び挿図中の番号は、実測図の番号と一致している。
7. 報告書に掲載のFig. 1は「国土地理院1:25000地形図土佐山田」を複写して使用し、Fig. 2は「1:2500高知広域都市圏7」を複写縮小して使用した。
8. 調査に当っては、地権者ならびに地元の方々の御協力をいただいた。また、現地作業及び整理作業に当ってくださった多くの皆様の御援助に対し、記して衷心より謝意を表したい。
9. 出土人骨の鑑定は、高知医科大学第一解剖学教室山本恵三教授にお願いし、山本教授には玉稿を賜わった。記して深く謝意を表したい。
10. 遺物は、土佐山田町教育委員会で保管している。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第Ⅱ章 遺跡の歴史的環境	3
第Ⅲ章 調査の概要	5
(1) 調査の方法	5
(2) 基本層序	5
第Ⅳ章 検出遺構	9
第Ⅴ章 出土遺物	18
第VI章 総括	24
(1) 弥生時代の遺構・遺物について	24
(2) 中世の遺構・遺物について	24
(3) 竪穴状遺構 S T21について	26
(4) 円筒埴輪状須恵器について	26
付編	31
1. 大塚古墳と S T21について	32
2. S K51出土人骨について	35

挿 図 目 次

Fig. 1 大塚遺跡位置図.....	2
Fig. 2 大塚遺跡と週辺の遺跡.....	4
Fig. 3 基本層序.....	6
Fig. 4 遺構全体図.....	8
Fig. 5 S T21.....	10
Fig. 6 S D30・30-1・30-2・31・32・33・34・36.....	11
Fig. 7 S K50・51・53・55.....	13
Fig. 8 S K56・60・62、S X 1.....	15
Fig. 9 遺物実測図 1.....	19
Fig. 10 遺物実測図 2.....	20
Fig. 11 遺物実測図 3.....	21
Fig. 12 遺物実測図 4.....	22
Fig. 13 遺物実測図 5.....	23
Fig. 14 土師質土器法量分布グラフ.....	25
Fig. 15	33
Fig. 16	34
Fig. 17 S K51出土人骨（左側頭骨錐体部）残存部分表示図.....	36
Fig. 18 S K51出土人骨（下顎骨）残存部分表示図.....	36

表 目 次

表 1 周辺の遺跡名対照表.....	1
表 2 土壌・性格不明遺構計測表.....	17
表 3 遺物観察表 1.....	28
表 4 遺物観察表 2.....	29

図版目次

PL. 1	遺構検出風景・調査区南半部遺構検出状態	41
PL. 2	調査区南半部遺構検出状態・同完掘状態	42
PL. 3	調査区南半部遺構完掘状態	43
PL. 4	調査区北半部遺構検出状態・同完掘状態	44
PL. 5	調査区北半部遺構検出状態・同完掘状態	45
PL. 6	S T21	46
PL. 7	S T21・同土師質土器出土状況	47
PL. 8	S D30五輪塔出土状況・S D31須恵器出土状況	48
PL. 9	S D31土師質土器出土状況・S D36	49
PL. 10	S K50	50
PL. 11	S K50土師質土器出土状況・S K51	51
PL. 12	S K51人骨出土状況・同完掘状態	52
PL. 13	S K53・同土師質土器出土状況	53
PL. 14	S K55・S K56	54
PL. 15	S K57・同土師質土器出土状況	55
PL. 16	S K57土師質土器出土状況・S K60	56
PL. 17	弥生土器・須恵器	57
PL. 18	円筒埴輪状須恵器	58
PL. 19	土師質土器	59
PL. 20	土師質土器	60
PL. 21	備前焼・東播系須恵器・鉄釘・五輪塔	61
PL. 22	S K51出土人骨 1	62
PL. 23	S K51出土人骨 2	63
PL. 24	S K51出土人骨 3	64

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

大塚遺跡の発掘調査は、土地所有者の個人宅地造成工事計画に先立って、該当地の埋蔵文化財の記録保存を図るために、国庫補助事業として行われた。

大塚遺跡は、弥生時代～近世の遺物が散布する集落跡として知られており、旧国道195号線を挟んで北には、弥生時代後期の集落跡として知られるひびのき・ひびのきサウジ両遺跡と接し、また東には、県下に現存する唯一の前方後円墳といわれる大塚古墳に接しており、長岡台地に分布する数多くの遺跡の中心的位置に存在し、いわゆるひびのき遺跡群の一角をなす遺跡という見方も可能であろう。こうした意味で、少なくとも大塚遺跡は、ひびのき遺跡群の弥生集落の広がりを知る上で重要であり、また山田城跡を中心とした戦国城下町の様相を復元する上でも重要な遺跡であるといえる。

以上のような観点から、土佐山田町教育委員会が発掘調査を行うことになり、平成2年7月4日～8月3日の間、調査を実施した。なお、発掘調査面積は610m²である。また、測量基準杭はひびのきサウジ遺跡調査時設定(1989)の基準杭から索引した。

表1. 周辺の遺跡名対照表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	大法寺古窯址群	古墳～平安	28	山ノ間丸遺跡	中世	55	時久遺跡	古墳
2	入野南遺跡	平安～中世	29	予岳古窯址群	古墳～平安	56	町田堀東遺跡	绳文～中世
3	八ノ谷麻跡	平安	30	予岳吉墳	古墳	57	秋葉山城跡	中世
4	植セガイ窯跡	古墳～奈良	31	メウカイ遺跡	弥生～中世	58	前ノ山城跡	〃
5	大谷吉窯址群	奈良～平安	32	長谷川丸遺跡	古墳～平安	59	西佐古遺跡	平安～中世
6	三反山田窯跡	平安	33	伏原遺跡	弥生～平安	60	クロアイ遺跡	弥生～中世
7	新改古窯址群	古墳～平安	34	越野学園古墳	古墳	61	野々下遺跡	古墳～平安
8	小山田1～2号墳	古墳	35	小倉山古墳	〃	62	下夕野遺跡	古墳～中世
9	黒原田丸遺跡	中世	36	ひびのき岡の神母遺跡	弥生～中世	63	黒土遺跡	弥生
10	南ヶ内遺跡	弥生～古墳	37	ひびのきサウジ遺跡	弥生～近世	64	東時光石遺跡	古墳
11	新改古墳群	古墳	38	大塚古墳	古墳	65	大領遺跡	古墳～中世
12	西ノ内麻跡	〃	39	ひびのき遺跡	弥生～古墳	66	ヤイタ遺跡	〃
13	薬原神社遺跡	奈良～中世	40	ひびのき大河内遺跡	弥生～近世	67	下門田遺跡	〃
14	タンガン窯跡	飛鳥	41	日城跡	中世	68	宮後遺跡	弥生～平安
15	タンガン古墳	古墳	42	田所神社遺跡	弥生～中世	69	姥ヶコタ遺跡	古墳～平安
16	タンガン遺跡	平安	43	横田遺跡	〃	70	神通寺遺跡	弥生～平安
17	須江北遺跡	古墳～平安	44	前ノ芝遺跡	弥生～平安	71	七反田遺跡	奈良～平安
18	須江上段遺跡	古墳～近世	45	大西土居遺跡	弥生	72	口戸遺跡	古墳～中世
19	須江駅跡	平安	46	楠目遺跡	弥生～近世	73	坂西遺跡	〃
20	植南土居遺跡	平安～中世	47	福荷前遺跡	〃	74	中井ノ北遺跡	奈良～平安
21	植村城跡	中世	48	古町北遺跡	弥生～古墳	75	東臼井遺跡	古墳
22	植カドタ遺跡	弥生～古墳	49	吉町西遺跡	弥生～平安	76	新野遺跡	〃
23	西クレドリ遺跡	弥生～近世	50	原遺跡	弥生～近世	77	松原丸遺跡	奈良～平安
24	モジリカウ遺跡	〃	51	高柳土居城跡	中世	78	松原丸下遺跡	〃
25	前山1・2・3号墳	古墳	52	高柳遺跡	弥生～中世	79	山田三ツ又西遺跡	古墳～平安
26	前行古墳群	〃	53	一ツ橋遺跡	古墳～平安	80	山田三ツ又遺跡	〃
27	植キノサキ遺跡	中世	54	原南遺跡	弥生～近世	81	山田三ツ又東遺跡	弥生～近世



第II章 遺跡の歴史的環境

大塚遺跡は、高知平野の東部を南流する物部川右岸の、河岸段丘である長岡台地上に立地する。大塚遺跡のある土佐山田町は、高知市の東方18キロ、県内最大の穀倉地帯である香長平野の北端に位置しており、大塚遺跡は土佐山田町市街地の東端の部分に位置している。

土佐山田町の歴史は、縄文時代早期の飼古屋岩陰遺跡にその上限を求めることができる。飼古屋岩陰遺跡からは縄文早期の押型文土器や、多量のサヌカイト製石鏃が出土しており、遺跡の遺存状態は決して良くはなかったが、吉野川上流地域では最古の遺跡として知られている。

弥生時代では、中期の龍河洞遺跡・稻荷前遺跡、後期の林田遺跡・ひびのき遺跡・ひびのきサウジ遺跡などが知られる。特にひびのき遺跡から出土した弥生後期～古墳時代初頭の土器群は、ひびのきI～III式土器と命名され、高知県中央部以東では標準土器とされている。

古墳時代には、弥生時代後期から継続して當まれたひびのき・ひびのきサウジの両集落遺跡が存在する。また後期古墳では、新改古墳群・前行古墳群など教箇所の古墳群が挙げられ、大塚遺跡の周辺でも、後期で県内に現存する唯一の前方後円墳といわれる大塚古墳、横穴式石室をもつ小倉山古墳・雪ヶ峯古墳などが存在している。

歴史時代になると、古代では須江遺跡群や植タンカン窯跡など新改地区の窯跡群、香美郡街跡推定地とされる大領遺跡、また須江遺跡群内の駅跡推定地などの遺跡があり、中世では大塚遺跡北方の山田城跡、また高柳土居城跡、そして中世の城下町に關連する遺構・遺物が確認されたひびのきサウジ遺跡がある。

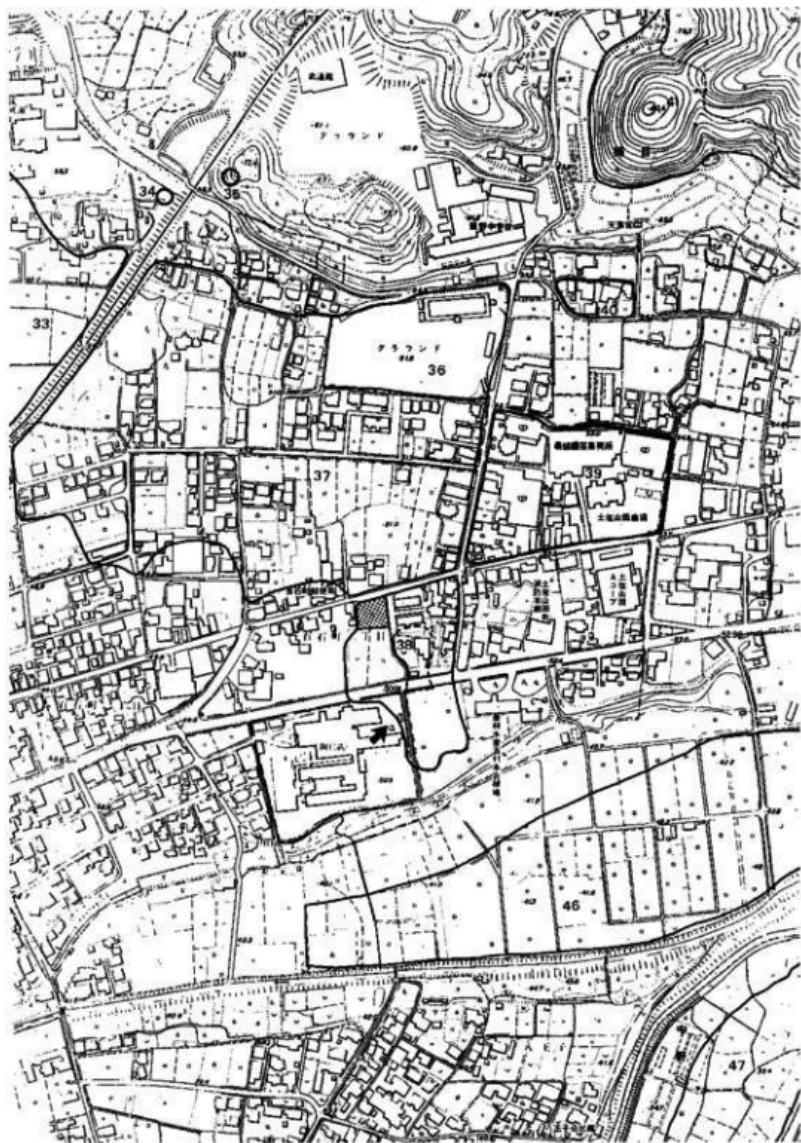


Fig. 2 大塚遺跡と周辺の遺跡

(矢印は大塚遺跡)

第III章 調査の概要

(1) 調査の方法

調査対象地は、ひびのきサウジ遺跡及び大塚古墳の隣接地であり、遺構等の所在が想定されたため、全面発掘を行った。調査に当っては、排土置場を確保するために、便宜上、調査区を北半部と南半部とに分け、南半部から調査を実施した。

調査手順としては、まず重機によって表土以下第V層上面までの堆積土を除去した後、人力によって遺構検出及び遺構の振り下げを行った。なお、第III・IV層は遺物包含層としておさえることが可能であるが、検出される遺物の量が非常に少ないため、重機を使用した除去作業でも調査自体には影響ないと判断したものである。

検出された遺構の実測に関しては、平成元年度実施の、ひびのきサウジ遺跡発掘調査で設定された任意座標を引き続き使用した。その任意座標とは即ち、「地積測量図の境界点(10) X=43.081, Y=11.012を発掘調査基準点(X=100.000, Y=100.000)とし、磁北方向を基準線(0°-0'-0")とする任意座標」であり、一辺4mのグリッドを最小単位として設定して測量を行った。

また、遺構名(番号)に関しても、本遺跡で検出された遺構群は、平成元年度調査のひびのきサウジ遺跡で確認された遺構群と一連のものとして把握することが適当であると判断したため、「ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書」で使用された遺構名を尊重して、これとの重複を避けるため、それぞれの遺構番号は1番から始まるものではなく、以下のようにその開始番号を設定した。

竪穴状遺構(竪穴住居址) : S T21~

溝跡 : S D30~

土壙 : S K50~

性格不明遺構 : S X 1~

ピット及び柱穴 : P 2000~

(2) 基本層序

調査によって確認された基本層序は以下の通りである。

第I層：耕作土層

第II層：褐色粘砂土層

第III層：暗褐色粘砂土層

第IV層：褐灰色粘砂土層

第V層：黄褐色砂礫土層

このうち、第V層が遺構面であり、第III・IV層が若干の遺物を含んでいる。なお、調査区南

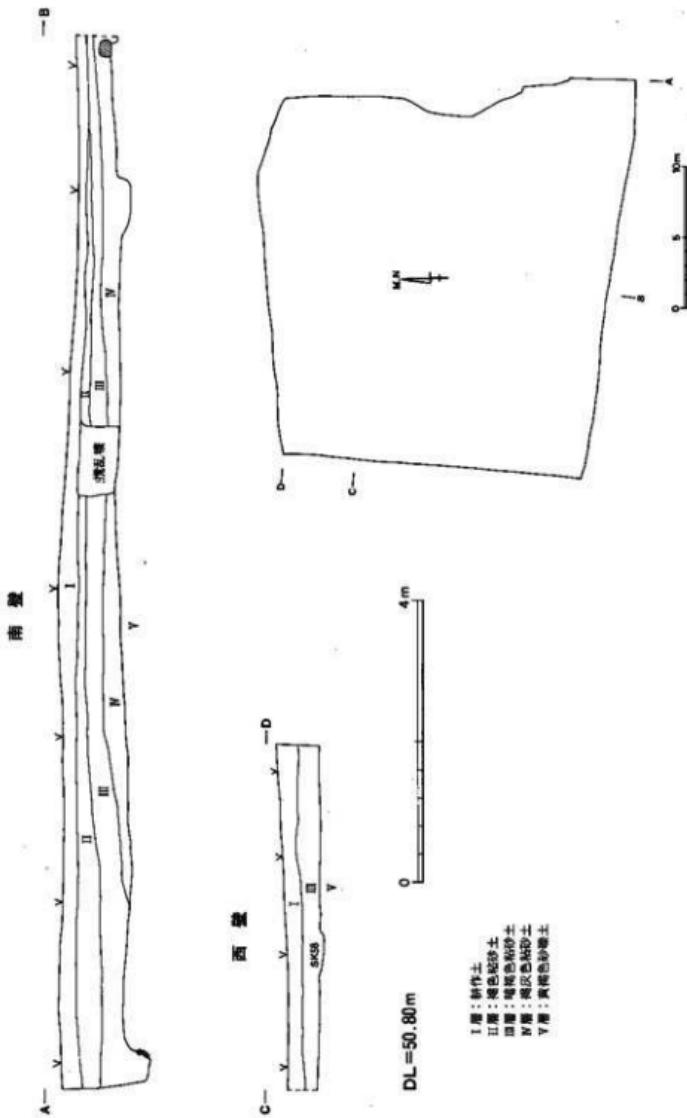


Fig. 3 基本層序

壁では上述の5層すべてが確認されるが、調査区の北半部西壁では、第II・IV層は観察されなかった。また、第V層は地山であり、径10~20cm程度の円礫を多量に含んでいる。包含層出土の遺物としては、須恵器片（Fig.9-7）、土師質土器（Fig.11-11）、そして近世の土器片、馬のものと思われる獸歯牙などが挙げられる。

註

- (1) 高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会 1990年



Fig. 4 造構全体図

第IV章 検出遺構

今回の調査で検出された遺構は、竪穴状遺構1基、溝8条、土壙21基、性格不明遺構1基、ピット34基である。遺構の数も限られていることから、時代別ではなく、各遺構ごとに記述していくことにする。

(1) 竪穴状遺構

S T21 (Fig. 5)

調査区の南半部、南東隅で検出された。南側を中世溝S D34に切られている。東及び南に更に続いており、全体の形態・規模は不明であるが、検出部分の規模は、長軸4.5m、短軸4.0mを測り、不整合形のプランを呈する。埋土はI～VI層からなり、壁の立ち上がりは約40cmである。遺構の東半部は、幅1.0m、高さ30cmの部分が掘り残されて土手状を呈する。この土手状の遺構もS D34に切られており、さらに東・南方向に続くものと思われ、ちょうどコーナー部分に当っている。土手状遺構上面には、浅いピット状の掘り込み(P 2032・P 2033)がみられる。土手状遺構の南東側は再び落ち込んでおり、斜面には円礫を貼りつけ、深さは70cm余りを測る。

遺物は、竪穴部分のI層から備前の壺片(Fig. 12-31)、II層から円筒埴輪状の須恵器(Fig. 10-9)が出土し、他に弥生土器片・土師質土器片が出土しているが、図示できるものはない。土手状遺構上面のP 2033からは、土師質土器の皿・小皿(Fig. 12-26~30)計5個体が出土している。

(2) 溝

S D30 (Fig. 6)

調査区北東部に位置する。S D31と直交し、更にS D30-1・30-2に枝分かれしている。主軸はN-14°-Eを示す。幅48~70cmで、検出面からの深さは42cmを測る。床面の北端の標高は49.987m、南端の標高は49.822mを測る。埋土はI～II層からなり、I層：褐色粘礫土、II層：暗褐色粘礫土である。

遺物は、弥生土器片・土師質土器片が出土しているが、図示できない細片ばかりである。また、S D31と直交する部分から五輪塔の水輪(Fig. 13-34)が出土している。

S D30-1 (Fig. 6)

調査区北東隅に位置し、S D30から分枝した北側の溝である。主軸は、南半部ではN-39.5°-E、北半部は屈曲してN-84.5°-Eを示し、調査区外東方に更に伸びている。幅32~60cm、検出面からの深さは11cmである。床面北東端の標高は50.072m、南西端の標高は50.077mを測る。

遺物は検出されていない。

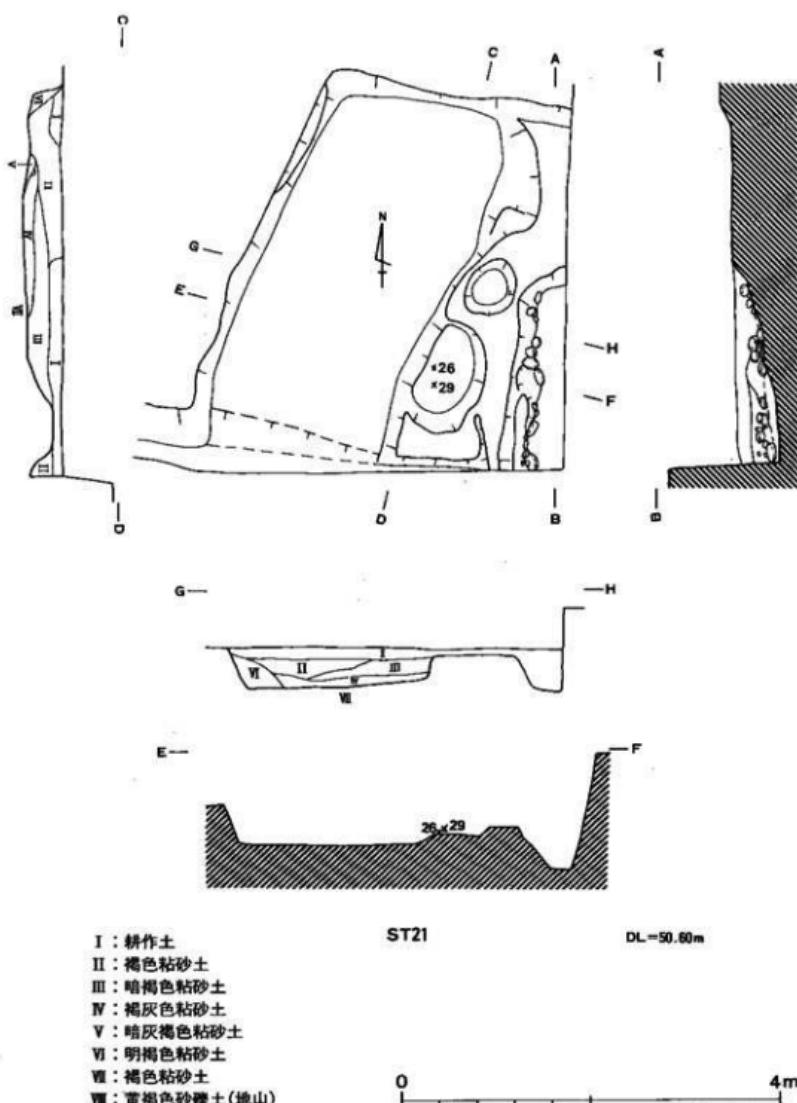


Fig. 5 ST21

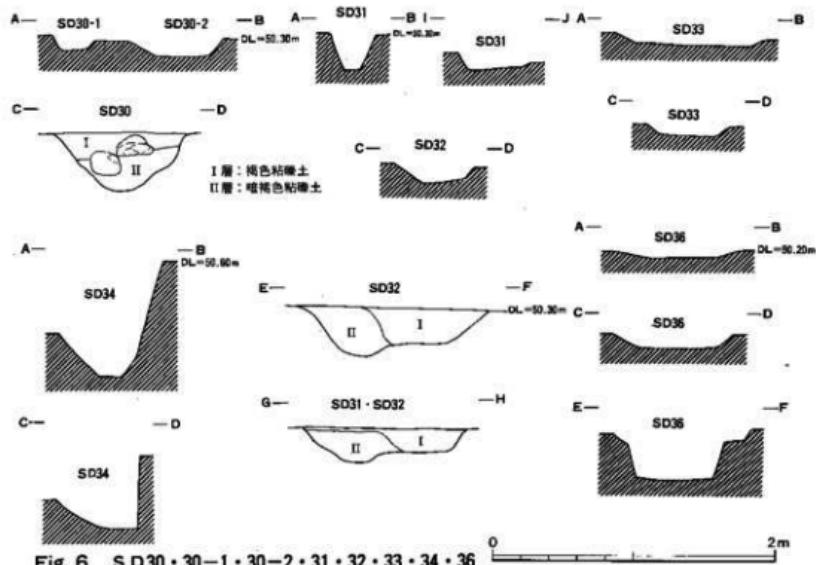


Fig. 6 SD30・30-1・30-2・31・32・33・34・36

S D30-2 (Fig. 6)

調査区北東隅に位置し、S D30から分岐した南側の溝である。主軸はN-70°-Eで、調査区外東方に更に延びている。幅46~66cmで、検出面からの深さは13cmを測る。床面北東端の標高は50.066m、南西端の標高は50.002mを測る。埋土は、褐色粘土単純一層である。

出土遺物には、土師質土器片・鉄釘 (Fig. 13-33) がある。

S D31 (Fig. 6)

調査区北部に位置する。東端近くで、直交する S D30を派生し、また並行する S D32に切られている。主軸はN-70.5°-Wで、西端近くでは屈曲してN-84°-Wを示し、調査区外東方及び西方に更に延びている。幅34~94cmで、検出面からの深さは35cmを測る。床面東端の標高は49.954m、西端の標高は49.952mを測る。埋土は、暗褐色粘土単純一層である。

出土遺物は、弥生土器片・須恵器片 (Fig. 9-8)・土師質土器壊 (Fig. 11-12) であるが、弥生土器片は図示不可能な細片ばかりである。

S D32 (Fig. 6)

調査区北部に位置し、その大部分が S D31を切っている。主軸はN-68°-Wを示し、調査区外東方に更に延びている。幅44~89cmで、検出面からの深さは25cmと、S D31よりも一段浅い。床面北西端の標高は49.959m、南東端の標高は50.056mを測る。埋土は褐色粘土単純一層である。

出土遺物は、弥生土器片・土師質土器片で、図示できるものはない。

S D33 (Fig. 6)

調査区北端部に位置する。主軸はN-82.5°-Wで、調査区外西方に更にのびている。幅56~64cmで、東端部分では幅104cmと幅広になり、検出面からの深さは8cmと非常に浅い。床面東端の標高は50.119m、西端の標高は50.026mを測る。埋土は暗褐色粘砂土単純一層である。

出土遺物は弥生土器片・土師質土器片・東播系須恵器片 (Fig. 12-32) である。

S D34 (Fig. 6)

調査区南端に位置し、調査区の南壁に並行している。東端近くでS T21を切り、主軸はN-80.5°-Wを示す。また、調査区外東方及び西方に更に延びている。幅は、溝の南側の立ち上がりが未検出のため不明であるが、88cm以上で、検出面からの深さは31cm以上である。床面東端の標高は49.569m、西端の標高は49.688mを測る。埋土は暗褐色粘砂土単純一層である。

出土遺物は、弥生土器片・土師質土器片 (Fig. 11-13~16) である。

S D36 (Fig. 6)

調査区南西部に位置し、南端部で落ち込み、S K70となる。南北方向を指向しながら、鉤状に屈曲し、北端部分はやや広い不整円形を呈する。また調査区外南方に更に延びている。幅78~136cmで、検出面からの深さは12cmを測る。床面南端の標高は49.868m、北西端の標高は49.988mを測る。埋土は暗褐色粘砂土単純一層である。

出土遺物は弥生土器片 (Fig. 9-1~6) で約700点を数えるが、殆どが細片で、図示できたのは6点のみである。

(3) 土 壤

S K50 (Fig. 7)

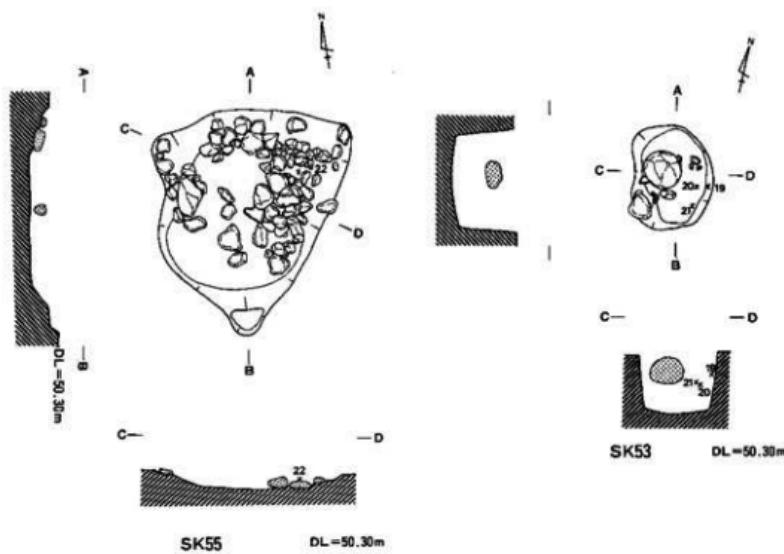
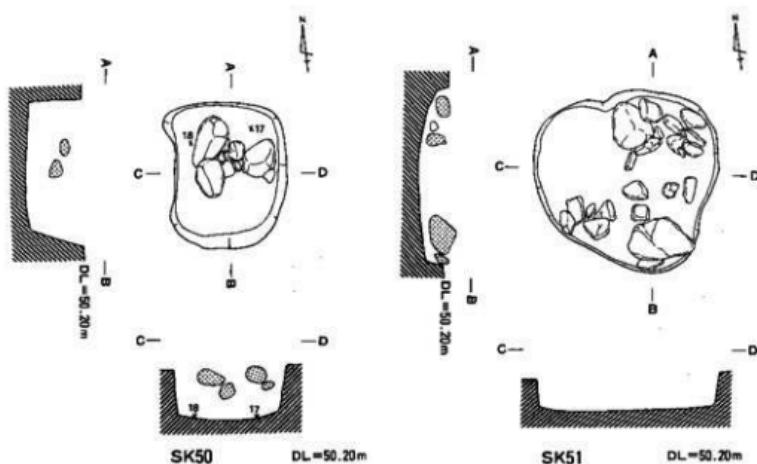
調査区の北西部、S K51の西側に位置する。プランは不整の隅丸方形を呈し、長径1.05m、短径0.8m、検出面からの深さは42cmを測る。掘り方断面は、方形に近い逆台形を呈する。長軸方向はN-6.5°-Eを示す。埋土は暗褐色粘砂土単純一層である。

出土遺物は弥生土器片・土師質土器片 (Fig. 11-17~18) であり、ただ一点の弥生土器片は混入と考えられる。

S K51 (Fig. 7)

調査区の北西部、S K50の東側に位置する。プランは不整の円形を呈し、径40~50cmの大型の礫2個をはじめ、約20個の礫を配する集石土壤である。長径1.31m 短径1.29m、検出面からの深さは24cmを測る。掘り方断面は、方形に近い逆台形を呈し、長軸方向はN-83°-Wを示す。埋土は暗褐色粘砂土単純一層である。

出土遺物は弥生土器細片一点と、人骨（頭蓋骨・下頬骨の一部他）、少量の炭化物（炭化木片）で、弥生土器片は混入と考えられる。人骨及び炭化物は、集石除去後、床面付近から出土



0 2m

Fig. 7 S K50 • 51 • 53 • 55

したものである。なお、集石に使用された砾のうち、5点には加工痕が認められ、五輪塔の一部かと思われる。

S K53 (Fig. 7)

調査区の北西部、S K50・51の南側にある。プランは不整の楕円形を呈し、長径0.73m、短径0.55m、検出面からの深さは46cmを測る。掘り方断面は、殆ど方形に近い逆台形を呈する。長軸方向はN-11.5°-Wを示す。埋土は暗褐色粘砂土単純一層である。

遺物は、土師質土器の壺3個体 (Fig. 11-19~21) が一括出土している。

S K55 (Fig. 7)

調査区の北西部、S K53の東側に位置する。プランは不整の三角形状を呈し、角砾・円礫約80個を配した集石土壤である。長径1.61m、短径1.33m、検出面からの深さは17cmで、掘り込みは浅い。掘り方断面は、南側に一段をなす皿状を呈する。長軸方向はN-10°-Eを示す。埋土は暗褐色粘砂土単純一層である。

遺物は、土師質土器の壺 (Fig. 11-22) が、集石上面から出土している。

S K56 (Fig. 8)

調査区のはば中央部に位置する。プランは不整の楕円形を呈し、角砾・円礫約50個を配した集石土壤である。長径1.44m、短径0.83m、検出面からの深さは33cmを測る。掘り方断面は不整の隅丸四角形を呈し、長軸方向はN-60.5°-Eを示す。埋土は暗褐色粘砂土単純一層である。

出土遺物は認められない。

S K57 (Fig. 8)

調査区の北東部、S D32の南側に位置する。プランは不整の方形を呈し、東及び南側の周縁部には、径25cm程度の円礫を配している。長径0.85m、短径0.65m、検出面からの深さは33cmを測る。掘り方断面は逆台形に近い不整の四角形を呈し、長軸方向はN-9.5°-Eを示す。埋土はI~II層からなり、I層：黒褐色粘質土、II層：褐色粘質土である。

出土遺物は弥生土器細片・土師質土器の壺 (Fig. 11-23・24) であり、弥生土器は混入によるものと思われる。

S K60 (Fig. 8)

調査区の南東部に位置する。プランは不整の円形を呈し、角砾・円礫を周縁部に配する集石土壤である。長径0.97m、短径0.93m、検出面からの深さは46cmを測る。掘り方断面は逆台形に近い不整四角形を呈し、長軸方向はN-5°-Wを示す。埋土は、暗褐色粘砂土単純一層である。

出土遺物は、土師質土器の壺 (Fig. 11-25) である。

S K62 (Fig. 8)

調査区のはば中央部に位置する。プランは不整の舟形を呈し、長径0.97m、短径0.93m、検出面からの深さは46cmを測る。掘り方断面は、北半部が摺り鉢状の逆台形を呈するが、南半部の

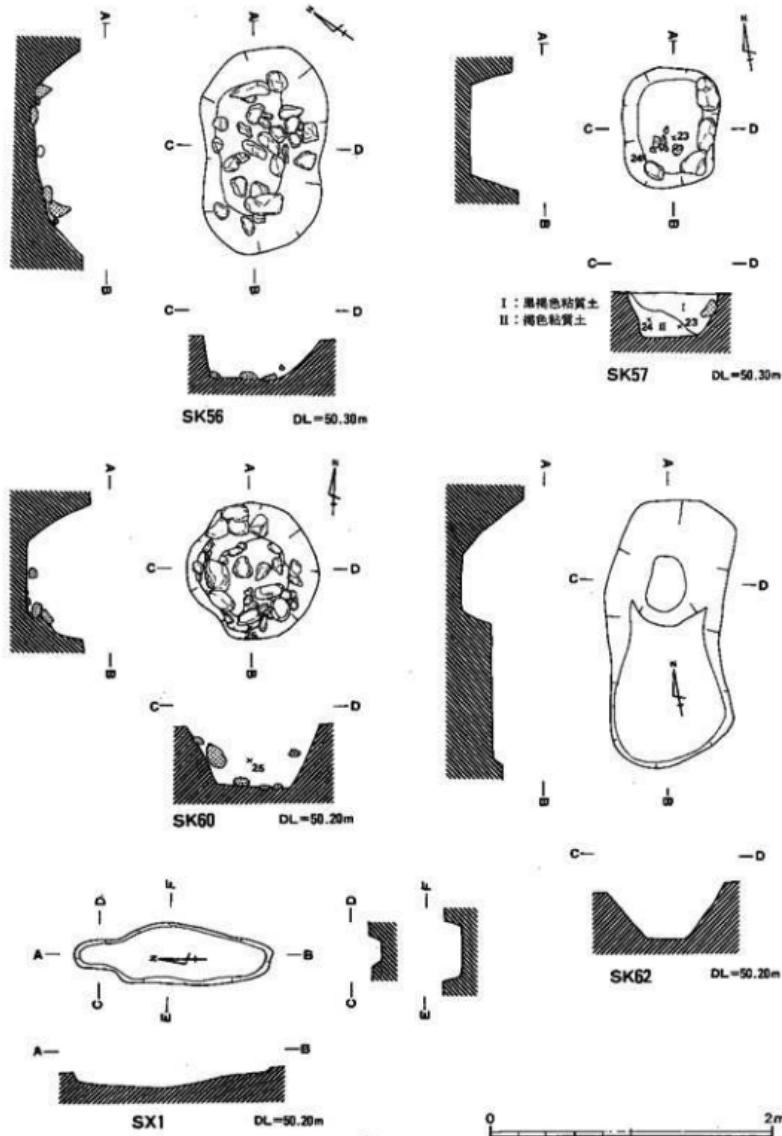


Fig. 8 S K56 · 57 · 60 · 62 · SX1

掘り込みは浅く、段状をなす。長軸方向はN-10.5°-Eを示し、埋土は暗褐色粘砂土單純一層である。

出土遺物は弥生土器片・土師質土器片であるが、図示できるものはない。

S K70

調査区の南西端部、S D36の南端部にある。プランは楕円形を呈し、長径0.9m、短径0.72m、検出面からの深さは28cmを測る。掘り方断面は逆台形を呈する。長軸方向は、N-23°-Eを示す。埋土は暗褐色粘砂土單純一層で、S D36との先後関係は確認できなかった。

出土遺物は弥生土器片があるが、細片ばかりで図示できるものはない。

(4) 性格不明遺構

S X 1 (Fig. 8)

調査区の北西部、S K53の南側に位置する。プランは不整の舟形を呈し、長径1.4m、短径0.43m、検出面からの深さは13cmで、掘り込みは非常に浅い。掘り方断面は、南端部がやや高い段状をなし、中央部が若干窪む形態を呈する。長軸方向は、N-1°-Wを示す。埋土は暗褐色粘砂土單純一層である。

出土遺物は弥生土器片があるが、図示不可能な細片ばかりである。

(5) ピット

ピットは34基が検出されているが、竪穴状遺構S T21の項で述べたP2033以外は、遺物は全く検出されず、各遺構の時代については不明であり、明確に建物を復元できる柱穴群はない。

表2. 土壙・性格不明遺構計測表

遺構番号	平面形態	規 模			出 土 遺 物	時代	備 考
		長径(m)	短径(m)	深さ(m)			
SK50	不整隅丸方形	1.05	0.80	0.42	弥生土器、土師質土器	中世	
SK51	不 整 円 形	1.31	1.29	0.24	弥生土器、人骨、炭化物	〃	集石土壤
SK53	不整格円形	0.73	0.55	0.46	土師質土器	〃	
SK55	不整三角形	1.61	1.33	0.17	〃	〃	集石土壤
SK56	不整楕円形	1.44	0.83	0.33	—	不明	〃
SK57	不 整 方 形	0.85	0.65	0.33	弥生土器、土師質土器	中世	
SK60	不 整 円 形	0.97	0.93	0.46	土師質土器	〃	集石土壤
SK62	不 整 舟 形	1.91	0.84	0.42	弥生土器、土師質土器	〃	
SK70	椭 円 形	0.90	0.72	0.28	弥生土器	弥生	
SX1	不 整 舟 形	1.40	0.43	0.13	〃	〃	

第V章 出土遺物

(1) 土器

今回の調査で出土した土器は、弥生土器・須恵器・土師質土器、そして備前・東播系須恵器などであるが、最も多くまとまって出土したのは、土師質土器である。以下、順に述べることとする。

弥生土器 (Fig. 9-1~6)

弥生土器片は、包含層及び各遺構から多く検出されたが、その殆どがローリングを受けた細片であった。辛うじて図示可能なのは、S D36出土の6点だけである。1~4は底部片で、器種は甕であると思われる。3以外は明らかに平底を呈し、すべて底部にまでタタキを施したものである。5・6は口縁部片で、ともに口縁端部をナデて凹面とするものである。器面調整は内外面ともにハケ調整によっている。

須恵器

包含層・S D31・S T21などから出土しており、器種には甕と円筒埴輪状のものとがある。

甕 (Fig. 9-7~8)

7は遺構検出中に包含層より採集されたもので、外面には蓆目状のタタキ、内面には同心円文のタタキを施している。8はS D31出土のもので、外面に平行タタキ、内面には同心円文のタタキを施す。

円筒埴輪状須恵器 (Fig. 10-9~10)

円筒埴輪あるいは器台状の器形をなすものの底部片である。9は竪穴状遺構 S T21出土、10は調査区での表採遺物である。直立気味に立ち上がっており、器面の調整は、外面はナデ・ヘラケズリ、内面はナデによっている。基底部外面の調整はヨコナデ・指頭押圧で、内面は指頭押圧によって端部を内側に拡張している。また、底面には植物の茎部と思われる圧痕がみられる。なお、10の外面には上端部にヨコハケ状のものが観察され、底部以上の腹部には、本来ヨコハケを施していた可能性がある。

土師質土器

本遺跡で最も多く出土したもので、器種では壺・小皿・皿の3種があり、中でも壺がその大半を占める。遺構では溝 S D31・34、土壇 S K50・53・55・57・60、竪穴状遺構 S T21などから出土しており、また遺構検出中に包含層からも検出されている。これらのうち、竪穴状遺構 S T21出土の26~30は、いわゆるカワラケと呼ばれるものである。

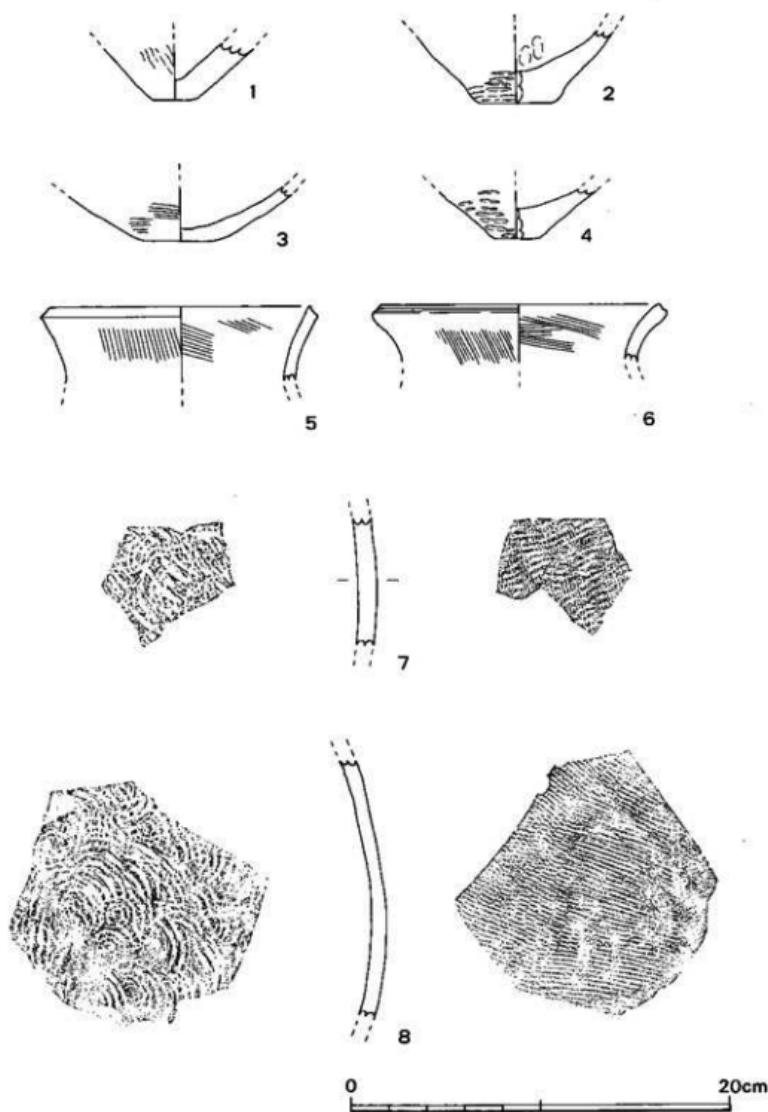


Fig. 9 遺物実測図1

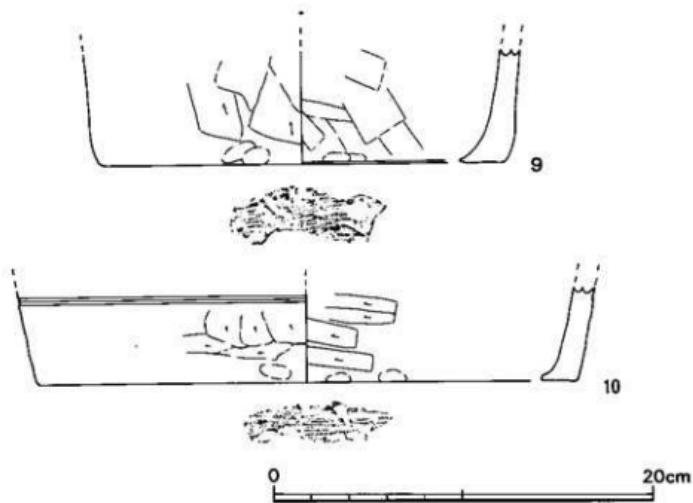


Fig. 10 遺物実測図2

壊 (Fig. 11-11~25)

体部の形態でみると、体部の立ち上がりが直線的なもの（12~14・16・18）、内弯するもの（11・15・17・23・24）、外弯するもの（19~21）、体部中位で屈折するもの（22・25）の四者がある。このうち、19~21の外弯する一群は、S K53からの一括遺物である。また、体部中位で屈折するもののうち、22は2箇所で屈曲して全体として内弯の形態を呈し、25は中位で段をなし、傾きを緩めて再び内弯しながら立ち上がるものである。口縁端部の形態は、11~14のように端部を明確に尖らせるものと、それ以外の丸くおさめるものとの二者がある。

すべてロクロ成形で、調整技法はロクロによるナデであるが、16と25は内面のナデ痕を明瞭に残す一群として抽出できる。

小皿 (Fig. 12-26~28)

いわゆるカワラケであり、S T21から3個体が出土している。底部は平らを指向し、体部は直線的もしくは緩く内弯して立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。手捏ね成形によっており、内外面とも不整方向のナデ調整を施している。また、胎土は非常に精良なものを使っている。

皿 (Fig. 12-29・30)

カワラケと呼ばれるもので、S T21から2個体が出土している。底部は平底を指向し、体部は内弯もしくは内弯気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げている。手捏ね成形によってお

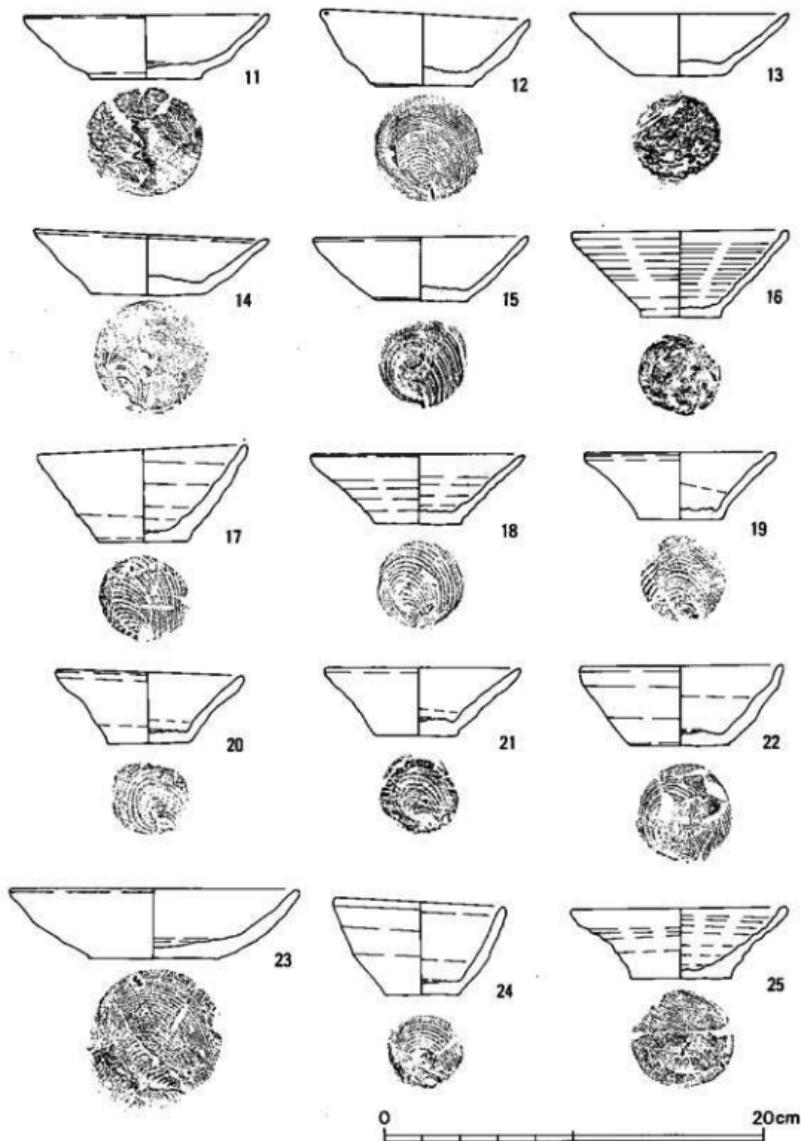


Fig. 11 遺物実測図3

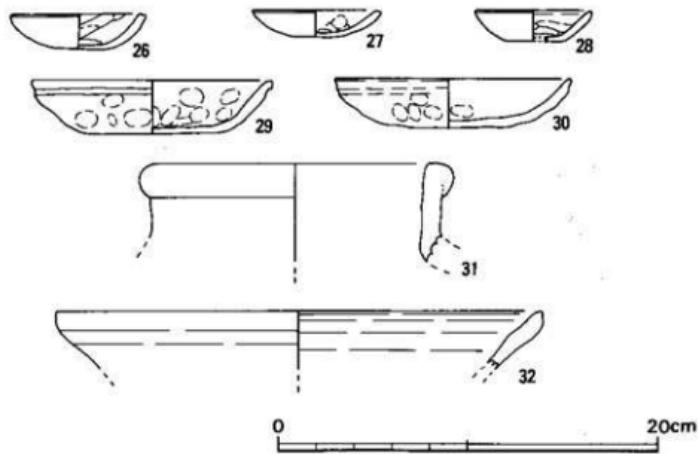


Fig. 12 遺物実測図4

り、調整は内外面とも不整方向のナデである。小皿と同様に、非常に精良な胎土を使用している。

備前 (Fig. 12-31)

S T21出土のもので、壺の口縁部片である。直立する頸部を有し、端部は玉縁状を呈する。内外面ともロクロによるナデ調整を施している。

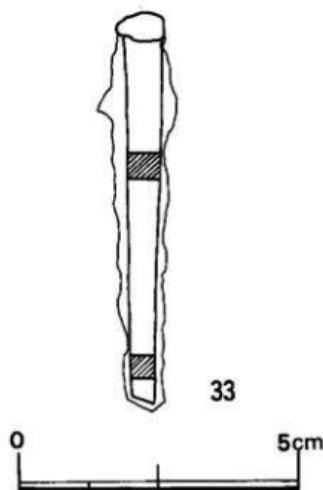
東播系須恵器 (Fig. 12-32)

S D33出土で、鉢の口縁部片である。口縁部直下で屈曲して外傾し、端部外面は内傾する凸面をなし、端部は尖り気味である。内外面ともロクロによるナデ調整で、重ね焼きによっているために、口縁部は外面から内面にわたって淡い色調を呈する部分がある。

(2) 鉄 器

鉄釘 (Fig. 13-33)

S D30-2出土で、全長7cmを測る。先端部に向かって先細りの形態で、先端部は欠損しているようである。断面は方形を呈し、釘頭部は若干折り返してある。



(3) 石 製 品

五輪塔 (Fig. 13-34)

S D30の、S D31と接する部分から出土した。水輪であり、平面形で梢円形を呈し、砂岩製である。表面には敲打痕が明瞭に残っている。

(4) その他の遺物

以上その他に、造構検出中に包含層から、近世土器片及び馬と思われる歯牙片などが出土している。また、S K51からは人骨片が出土した（付編参照）。

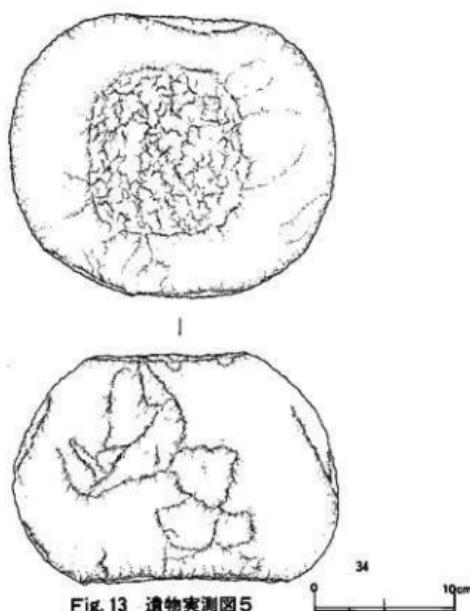


Fig. 13 遺物実測図5

第VI章 総括

今回の大塚遺跡の調査は、平成元年度ひびのきサウジ遺跡発掘調査区の南側に隣接する遺跡であるため、ひびのき遺跡群の弥生集落に続く、竪穴住居址等の遺構の検出が期待されたが、弥生時代の遺構は僅かに溝1条、土壙1基、性格不明遺構1基であり、出土の土器も細片が殆どで、図示可能なものはS D36の出土遺物のみであった。一方、中世の遺構は溝7条、土壙7基が検出され、遺物も弥生時代のものに比べれば多く出土している。竪穴状遺構S T21の時代及び性格については描くとしても、本遺跡の主体を占めたのは中世であるといえよう。また、全く遺物の出土しない遺構も多く、時期不明とした遺構も多いことを付記しておく。

以下、各時代の遺構・遺物、そして竪穴状遺構S T21と、円筒埴輪状の須恵器について若干の考察を加え、まとめとする。

(1) 弥生時代の遺構・遺物について

弥生時代の遺構として明確なものは、溝S D36、土壙S K70、性格不明遺構S X1の3基である。このうち、実測可能な遺物を出土したのは溝S D36のみであるが、それですらローリングによって磨滅を受けたものであった。また、溝としての掘り込みは非常に浅く、仮に溝としての機能を想定した場合、現検出面はかつての遺構面からかなりの削平及び開墾を経たものといえるであろう。出土の土器は、平底を指向するものが主体を占めている。土壙S K70は溝S D36と前後関係は不明ながらも切り合って存在するが、検出の遺物からも時期的に溝S D36とほぼ近接した遺構といえるであろう。また、性格不明遺構S X1はその形状から、かつての溝が削平を経てできたものとも考えられる。

(2) 中世の遺構・遺物について

中世の遺構は、溝7条、土壙7基がある。7条の溝のうち、S D30・30-1・30-2・31は一連の遺構として把握できるため、実質の溝は4条である。相前後して掘られているS D31・32、またS D34はほぼ直線的で、東西方向を意識して掘られていることから、ひびのきサウジ遺跡で検出されたS D10-A・17・18_{II}と同様に、星敷を区画する溝と考えられるのではないだろうか。

次に、中世とした土壙7基のうち、3基は集石土壙と呼べるものである。S K51は、床面付近から人骨・炭化物を検出した集石土壙である。ただ1片出土した弥生土器細片は流れ込みによるものと判断でき、また集石中にみられた破碎された加工砾は五輪塔の一部ではないかと考えられる。S K51の性格については、出土した人骨・炭化物、及び五輪塔片などを考え合わせると、中世の火葬墓ではないかと思われる。このS K51とS K50・53・55・56・57の6基は群集形態を示しており、プランは方形を指向したもの、円形、三角形を指向したものなどまちま

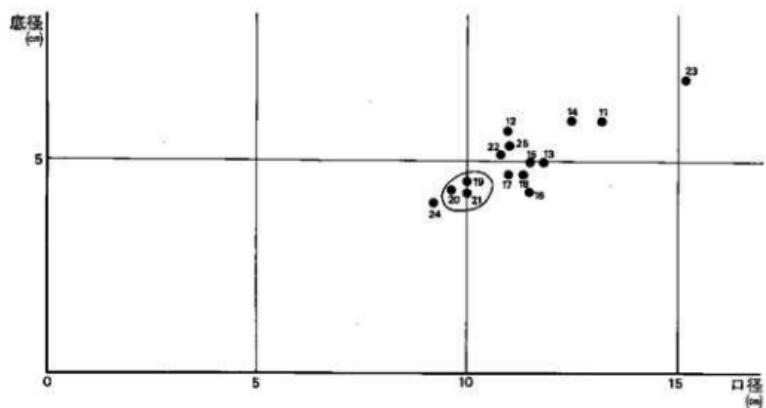
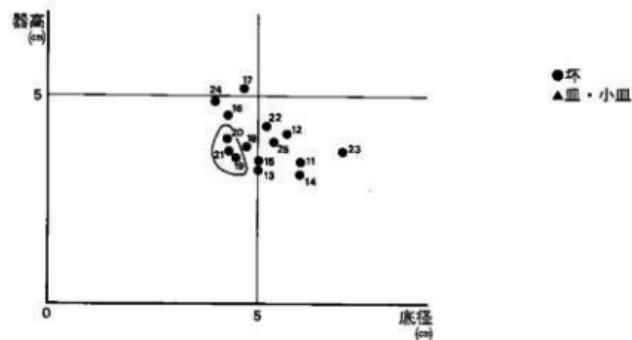
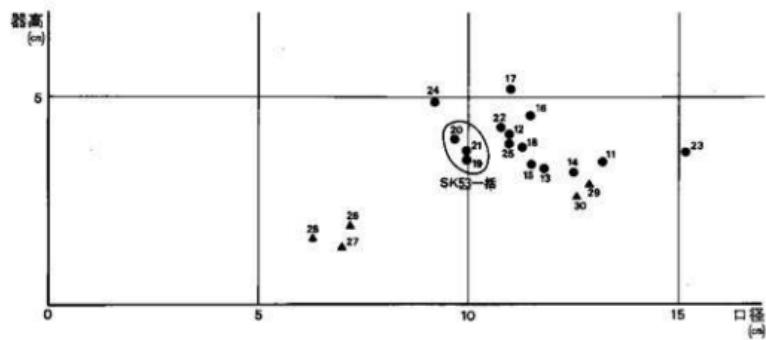


Fig. 14 土師質土器法量分布グラフ

ちであるが、すべて土壌中に砾を伴い、またSK51・56を例外として、すべての土壌からほぼ完形の土師質土器を出土している。このことから推測を重ねると、これら6基の土壌群は中世の墓地の一角を構成したものではないかと思われる。そして、これには上述の溝SD31・32が伴い、山田城を中心とした戦国期城下町の、墓地の区画に開与しているのではないだろうか。

出土遺物の土師質土器は、壺15点・小皿3点・皿2点が出土している。壺は、口径が小さく体部が外彎して立ち上がる一群(19~21)が、SK53から一括出土しており、ひびのきサウジ遺跡のSK15_{II}出土遺物と併行する時期のものと思われる。また、口径が15cmを超えて、口径4cm以下という大型のもの(23)と、口径9cm余りで口径5cm程度という小型で器高の高いもの(24)とがSK57から出土している。この二者の一括性については型式間に開きがみられ、慎重に取り扱うべきと考えるが、土壌断面の観察では同じ層位と捉えている。また、SK57を火葬墓とした場合には、両者の一括性は非常に高くなると思われる。ここでは24の時期から、SK57には16世紀後半という年代を考えておく。小皿・皿は、田村遺跡群Loc.42のSK96出土の一括資料₃₃と併行する時期のものと考えられ、15世紀後半~16世紀前半という時期が考えられよう。

(3) 竪穴状遺構ST21について

SD34に切られているため、まずSD34掘削以前という時期が与えられる。竪穴状の掘り込み内の出土遺物は、I層から偏前焼壺片、II層から円筒埴輪状須恵器片、また、明確な層位は不明ながら、床面近くからも弥生土器の細片が検出されている。土手の東側の掘り込み部分からは遺物がみられないために、この掘削の時期については断定できないが、この遺構の竪穴状掘り込み及び土手状の高まりは、遺構構築時から形成されていたものであろう。これは土層断面の観察からも明らかである。しかし、遺構構築の年代については、決定的な資料を欠くといわざるを得ない。少なくとも円筒埴輪状須恵器の古墳時代後期前後、または弥生時代後期以降と限定することは可能である。ただ、土手状遺構上面のピットP2033については掘り込みは浅いが土師質土器皿・小皿を一括出土しており、これについては明確な時期を与えることができる。仮にこの遺構を円筒埴輪状須恵器の時期のものであるとすれば、遺構の南東方に存在した大塚古墳との関連が想定できる。これは非常に魅力的な視点であるが、詳細は付幅に譲る。

(4) 円筒埴輪状須恵器について

今回の調査で、竪穴状遺構ST21から出土し、また調査区及び周辺から採集されているものである。いずれにしてもこれらの遺物は、調査区南東方に存在した大塚古墳に伴うものと考えてよいであろう。なお、周辺部からの採集品については図示していない。

図示した2点はともに底部片であり、体部はやや外傾気味に立ち上がっていることから、口縁部に向かって広がる円筒埴輪様の器形を呈するものではないかと思われる。

さて、南東部に隣接する大塚古墳からは、昭和52年の調査の際に円筒埴輪が出土したとされている。今回出土のものと同一のものか否かは未確認のため不明であるが、廣田典夫氏による土佐山田町史の記述⁴を以下に引用する。

「完形ではない。復元すると高さ55cm、底部の径23cm、口径28cmである。底部からやや広がりながら中央部で一つの造り出しがみられ、それより頸部にかけてやせばまる。口頸部はやや外反し、口縁部で一段の稜をつくり、その上部に四線帯がみられる。口頸部器面には横線帯がみられ、上部横線帯には籠描きの斜線文が一部みられる。」

上の記述の、中央部に「一つの造り出し」がみられ、「口頸部器面には横線帯」がみられるという記載から、1段のタガをもち、タガ以上の部分の外面にはヨコハケ調整が施されているものと考えられる。1段のタガという点に疑問は残るが、ほぼ円筒埴輪もしくはそれに類するものとしていいように思われる。外面のヨコハケ調整に関しては、今回出土のものにもそれを傍証する可能性のあるものがみられる。

以上のように、今回の大塚遺跡出土資料は、大塚古墳出土の円筒埴輪と呼ばれるものと同一のものである可能性が高いと思われる。しかし、本県では円筒埴輪の出土例はなく、また大塚古墳出土資料の類例といえるものもみられない。タガ状の造り出しをもつという、この円筒形の須恵器については、円筒埴輪または器台の一種の、いずれかを判断することは、既収集資料のみでは難しい。今後の発掘調査等により、使用方法、つまり埴輪としての配置状態等を示す資料が得られることによって、内容が明らかにされることが期待される。

註

- (1) 高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会 1990年
- (2) 同註(1)
- (3) 松田直則「Loc. 42」『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書田村遺跡群 第10分冊』高知県教育委員会 1986年
- (4) 廣田典夫「古墳時代の山田」『土佐山田町史』土佐山田町教育委員会 1979年

遺物観察表 1

標団 番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口様 基盤 底盤	形態・文様	手 法	備考
1	S D 3 6	弥生土器 壺	— (3.0) — 2.0	平底である。	外側はタタキ調査。 内面は磨滅のため調整不明。		
2	#	#	(3.7) — 4.0	#	外側はタタキ調査。 内面は指輪押捺が観察される。		
3	#	#	(2.9) —	平底気味である。	外側はタタキ調査。 内面は中心に指輪押捺による凹みがみられる。		
4	#	#	(2.5) — 2.4	平底で、底やかに外上方にのびて いる。	外側はタタキ調査で、底面近く では白質のためにタタキ目が消 えている。 内面は磨滅のため調整不明。 外面部ともハケ調査。 底部内面及び底面はヨコナデを 施す。		
5	#	#	(4.0) — —	腹部から外寄気味に外上方に立ち 上がり、口縁端部は外側する凹面 をなす。	外側はハケ調査。 腹部内面及び底面はヨコナデを 施す。		
6	#	#	(3.1) — —	腹部から外寄しながら外上方に立 ち上がり、口縁端部は外側にやや 肥厚する。口縁端部は内傾し、凹 状態を呈す。	外側と内面ともハケ調査。 腹部内面及び底面はヨコナデを 施す。		
7	包含層	須恵器 壺	— — —	底部片である。	外側には瘤目状のタタキ、内面 には同心円文のタタキを施す。		
8	S D 3 1	#	— — —	底部片で、内面を示す。	外側は平行タタキ、内面は同心 円文のタタキを施す。		
9	S T 2 1	須恵器 円筒埴輪	(6.0) — 21.5	底部片で、直立気味に外上方にの びる。	外側はヘラケズリ・ナデ調査。 内面はナデを施す。基底部外側 はヨコナデ・指輪押捺を施し、 内面は指輪押捺によって網目を 内側に強張している。底面には 植物茎部の圧痕がみられる。		
10	表 拝	須恵器 円筒埴輪	(5.0) — 29.0	底部片で、外上方に直線的にの びる。	外側はナデもしくはヘラケズリ 調査で、上端部にヨコナバ抜きの ものが観察される。内面はナデ 調査。基底部外側は埴輪から幅 約1.0mの部分をヨコナデし、指 輪押捺を加え、内面は指輪押捺 によって網目を内側に強張する。 底面には植物茎部と思われる圧 痕がみられる。		
11	包含層	土器質土器 环	13.2 3.4 — 6.0	底部は平らで、体部はやや内寄气 味に立ち上がり、口縁端部は尖り 気味に仕上げる。	内外部ともロクロによるナデ調 査。		
12	S D 3 1	#	— — —	11.0 底部は平らで、体部は中位後位を 除いて外上方に立ち上がり、口縁 部は外側が高くなして、端部は尖 り気味に仕上げる。	内面はナデ調査。	一部瘤突状のもの がみられる。	
13	S D 3 4	#	— — —	11.8 底部は平らで、体部はほぼ直線的 に外上方に立ち上がり、口縁端部 はやや尖り気味に仕上げる。	内面はナデ調査。		
14	#	#	12.5 3.2 — 6.0	12.5 底部は平らで、体部はやや内寄气 味に立ち上がり、口縁端部は尖り 気味に仕上げる。	内面はナデ調査。		
15	#	#	11.5 3.4 — 5.0	11.5 底部は平らで、体部はやや内寄气 味に立ち上がり、口縁端部は丸く 仕上げる。	内面はナデ調査。		
16	#	#	11.3 4.6 — 4.3	11.3 底部は平らで、体部はほぼ直線的 に外上方に立ち上がり、口縁部は 内面に若干干渉させて、端部は 丸く仕上げる。	内面はナデ調査。		

遺物観察表2

擇因 番号	遺物番号	器種	重量 (g)	口縁 器高 底径 底径	形態・文様	手 法	備 考
17	S K 5 0	土師質土器 环	11.0 5.2 — 4.7	底部は平らで、体部はやや内窪気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。	内外面ともロクロによるナゲ調整。 底部切り離しは回転糸切りによる。		
18	#	#	11.3 3.8 — 4.7	底部は平らで、体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。	内外面ともロクロによるナゲ調整。 底部切り離しは回転糸切りによる。		
19	S K 5 3	#	10.0 3.6 — 4.5	底部は平らで、体部は外窵しながら外上方に立ち上がり、口縁端部は平面にならし、端部は丸く仕上げる。	#		
20	#	#	9.7 4.0 — 4.3	底部は平らで、体部は外窵しながら外上方に立ち上がり、口縁端部は外側に肥厚させて、端部は丸く仕上げる。	#		
21	#	#	10.0 3.7 — 4.3	底部は平らで、体部はやや内窪気味に立ち上がり、口縁端部は外側が圓をなし、端部は丸く仕上げる。	#		
22	S K 5 5	#	10.8 4.3 — 5.2	底部は平らで、体部は2箇所で屈折しながら外上方に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。	#		
23	S K 5 7	#	15.2 3.7 — 7.0	底部は平らで、体部は内窪気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。	内外面ともロクロによるナゲ調整で、底面内面には不整方向のナゲが若干みられる。底部切り離しは回転糸切りによる。		
24	#	#	9.2 4.9 — 4.0	底部は平らで、体部は内窪して立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味に仕上げる。	内外面ともロクロによるナゲ調整。 底部切り離しは回転糸切りによる。		
25	S K 6 0	#	11.0 3.9 — 5.4	底部は平らで、体部は中位まで外窵、その内窪して立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。	内外面ともロクロによるナゲ調整で、ナゲ痕が明顯に残る。 底部切り離しは回転糸切りによる。		
26	S T 2 1	小 皿	7.2 1.9 — 2.7	底部はやや氣味で、体部は緩やかに内窪して立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。	手捏ね成形。 内外面とも不整方向のナゲ調整。	胎土は非常に精良。	
27	#	#	7.0 1.4 — 2.5	底部は平ら気味で、体部は緩やかに内窪して立ち上がり、口縁端部は窪凹が大きいが、丸く仕上げる。	手捏ね成形。 内外面ともナゲ調整。内面のナゲは中心から放射状に右回りに残す。	#	
28	#	#	6.3 1.6 — 3.0	底部は平らに近く、体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。	手捏ね成形。 内外面ともナゲ調整。	#	
29	#	皿	12.9 2.9 — 8.0	底部はほぼ平らで、体部はやや内窪気味に立ち上がる。口縁端部は外側に折り返して、端部裏面では回輪状を呈し、端部は丸く仕上げる。	#	#	
30	#	#	12.6 2.6 — 5.2	底部はほぼ平らで、体部は緩やかに内窪して立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。	#	#	
31	#	圓 蓋	15.0 (5.2)	頸部は直立し、口縁端部は玉縁状を呈する。	内外面・暗面ともロクロによるナゲ調整。		
32	S D 3 3	須 恵 器	16.0 (3.1)	口縁部は直部で直面して外傾し、端部は尖り気味に仕上げる。	内外面ともロクロによるナゲ調整。	東晉系。 口縁端部は重ね焼きのために焼成が良く、温い色調を呈す。	
33	S D 30-2	鉢 灯	全身 全幅 全厚 厚度 最大 最大 最大 厚	7.0 0.7 0.5 15.0 16.5 23.5 20.1 11.5	此面は長方形を呈し、先端部に向かって先鋒りとなっている。 仰頭部は毛干鋒り返してある。	—	
34	S D 3 0	五 輪 塔	水輪である。 平面形は橢円形を呈す。	表面には落打痕が明瞭に残る。	砂岩製。		

付 編

1. 大塚古墳と S T21について
2. 大塚遺跡出土人骨について

付編1 大塚古墳とST21について

大塚古墳は、土佐山田町楠目伏原678番地他に所在する古墳時代後期の前方後円墳である。大塚遺跡の南側に接して位置し、標高51m前後の微高地上に立地する。後円部と前方部のくびれ部が国道195号線と旧国道間の生活道として僅かに遺存し、墳形の一部をとどめる。古墳周辺は既に宅地化されており、前方部は国道195号線によって寸断されている。旧状の大半が削平等をうけており、遺存度は良好ではないが、現存する県下唯一の前方後円墳である。地籍図及び現況地形等から、後円部径30m、前方部長約14m、前方部先端幅約24m、全長約45m前後の前方後円墳であると復元されている。

昭和52年の発掘調査により、後円部から竪穴式石室が検出され、多量の須恵器・金銅製杏葉・玉類・鉄刀子・鐵鎌等が出土した。須恵器は、杯・高杯・台付子持高杯・台付子持広口壺・台付直口壺・台付長頸壺・台付楕・直口壺・甌・甌台・須恵器円筒埴輪等がみられ、出土量としては県下最大である。出土遺物から、6C初頭～前半に築造時期が求められ、高知平野東部を掌握した人物の奥津城とみられる。

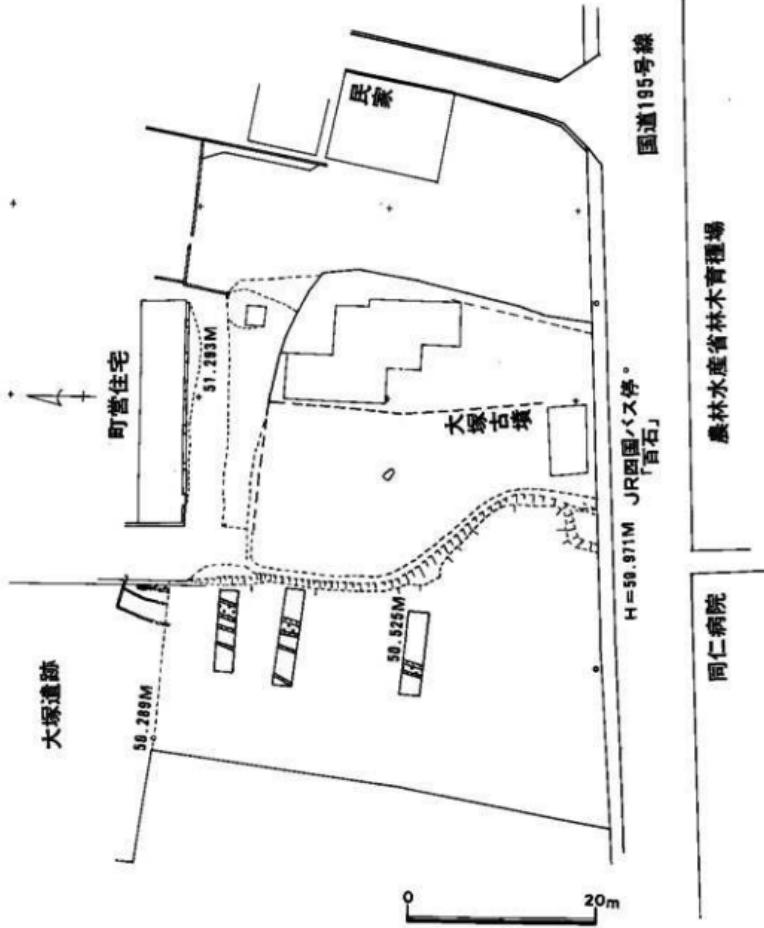
昭和52年の調査では、埋葬施設が検出され、主体部の位置・築造時期・副葬品等の内容が確認されている。但、墳丘周辺については未調査であり、墳形・規模・外部施設等については未確認であり、須恵器円筒埴輪とされる遺物についても埋葬施設に伴うものか、外部に樹立されたものか等の内容は不明瞭な状態であった。

ST21は、調査区南東隅で検出された平面不整台形形状の遺構であるが、大塚古墳後円部北西に位置し、その検出状態から周溝等の西側斜面部である可能性をもつこと、また、須恵器円筒埴輪片等が遺構埋土中から出土したことなどから大塚古墳の関連遺構と推察された。しかし、部分的な検出範囲であり、その性格が不明なため、ST21の内容を確認するために調査区の南側に3ヶ所のトレンチを設定し、関連調査を実施した。

確認調査では、ST21の南側延長部が検出され、①ST21は地山（黄褐色粘土）を掘削して整形された溝である。②大塚古墳西側周縁に形成されている。③埋土中から須恵器円筒埴輪片が多數出土し、形成時期は大塚古墳築造期に併行すると考えられる。④須恵器円筒埴輪は、すくなくとも後円部墳丘上に樹立されていた可能性が高い。⑤ST21は大塚古墳の周溝である可能性が強い。等の内容が明らかとなった。確認調査の成果から、大塚古墳は従来考えられていましたよりも広い墓域を有し、周溝等の外部施設を有することが判明した。なお、ST21の形成範囲・大塚古墳の墳形等については確認するに至らなかった。出土遺物等の分析及び今後の発掘調査等により大塚古墳の全容が明らかにされることが期待される。

註

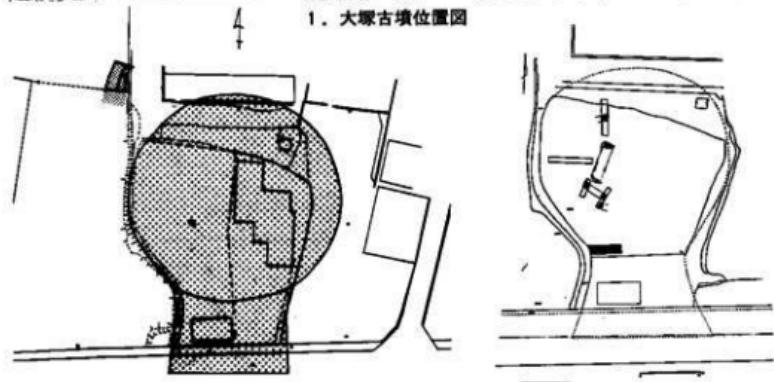
- (1) 廣田典夫「高知県土佐山田町大塚古墳」『古代学研究』103号 1984 古代学研究会
- (2) (1)・廣田典夫「土佐の古墳」『高知の研究』1 清文堂、廣田典夫「山田の古墳時代」『土佐山田町史』1979 土佐山田町
- (3) 石室の形態及び出土遺物等から、追葬が考慮される。初期横穴式石室とみられる。
- (4) 註(1)による
- (5) 付図1参照



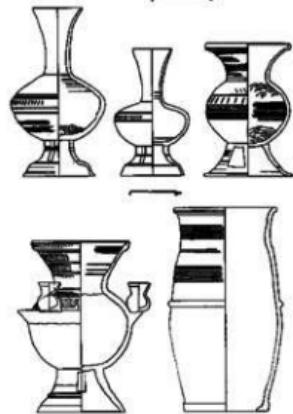
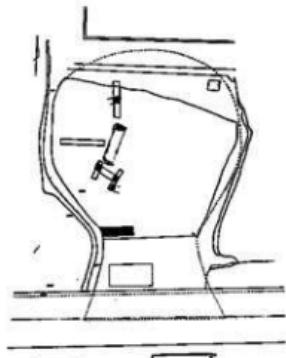
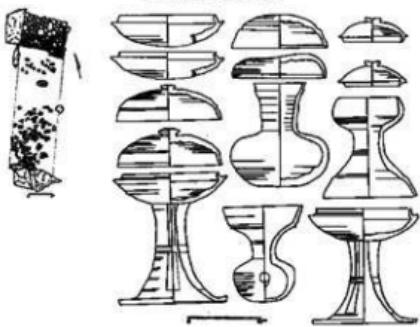
付図1 大塚遺跡及び大塚古墳周辺地形図



1. 大坂古墳位置図



2. 地形復元図



3. 主体部及び出土遺物

(廣田典夫「高知県土佐山田町大坂古墳」『古代学研究』103号 1984 古代学研究会から)

付図 2 大坂古墳の概要

付編2 大塚遺跡出土人骨について

高知医科大学 第一解剖学教室

教授 山本 恵三

大塚遺跡の調査によって、中世墓（SK51）から人骨が出土している。この人骨についての所見は下記の通りである。

出土した人骨は、側頭骨錐体部と判定されるもの1つ、下顎骨の一部と判定されるもの4つその他の細骨片多数である。

I. 側頭骨錐体部と判定される骨片

この骨片は左側頭骨錐体の上半部で、下半部と先端の一部（三叉神経圧痕の部分）を欠失している。そのため、破断面では鼓室が開放されている。骨片は頑丈でやや大きく、弓状隆起、内耳孔、大錐体神経溝など、各種構造物が明瞭に認められ、緻密質表面の状態にも人為的操によると思われる変化は殆ど認められない。性別は明らかではないが、成人のものと推定される（Fig.17；写真PL.22）。

II. 下顎骨の一部と判定される骨片

これらの骨片は4つある。それらの位置は図18に示した。骨片1（写真PL.23-1）は、右筋突起から右オトガイ孔の近くに達する下顎枝と下顎体の一部の外側部に相当するもので、表面の緻密質が一部剝離しており、海綿質中を貫通している下顎管の一部が認められる。歯槽には歯根の一部が残存しており、臼齒の歯根と思われるが、歯を特定するには不充分である。骨片2（写真PL.23-2）は、下顎体左側後端部の内側部の一部と推定され、開放された歯槽内側部が認められるが、変形もあり歯根も残っていない。骨片3（写真PL.24-3）は、下顎体前端部の切歯歯槽部の一部と推定されるもので、やはり開放された歯槽の前半部が認められるが、多少変形しており、歯根は残っていない。

これらの骨片は華奢で黄白色を呈し、骨片1と骨片2の表面には緻密質に多数の微細な亀裂が認められ、骨片1では緻密質の一部が剝離するなど、何らかの人為的操によって生じたと思われる変化や変形を示している。骨片3は、表面の色調は他の2つの骨片と極めて類似しているが、亀裂らしいものは認め難い。これらの骨片は、骨片3に亀裂らしいものが認め難いものの、その他の状態の類似性からみて、同一骨の一部であることが推定できるが、性別、年令は判定し難い。

III. その他の骨片

これらの多数の骨片は細片であり、判断は不可能な状態である。

これらの骨片のうち、IとIIの骨片群については、側頭骨および下顎骨のそれぞれ一部であることは推定できるが、骨片表面の構造物の状態や色調の差、Iの骨片が比較的頑丈で大きいこと、IIの骨片が相当に華奢であること、又、IIの骨片には何らかの人为的操作によって生じたと思われる変化や変形が散見されることなどから、これらI・IIの骨片が同一個体に由来するものと判断することは困難な点があり、むしろ別個体に由来する可能性を考える方が適切であろう。



fig 17 SK51 出土人骨（左側頭骨錐体部）残存部分表示図

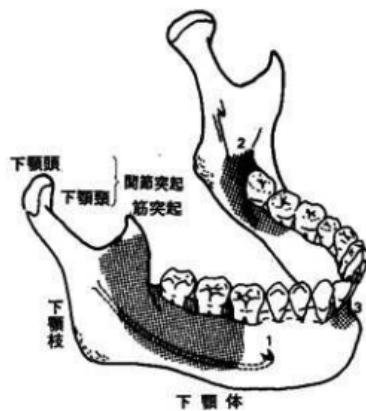


fig 18 SK51 出土人骨（下頸骨）残存部分表示図

写 真 図 版



造構検出風景（南より）



調査区南半部造構検出状態（南より）

PL. 2



調査区南半部遺構検出状態（南より）



同上 実掘状態（南より）



調査区南半部遺構完掘状態（北西より）



同上 近景（北西より）

PL. 4



調査区北半部遺構検出状態（南より）



同上 完掘状態（東より）



調査区北半部遺構検出状態（西より）



同上 完成状態（西より）



同上 (北より) ST21



同上 (南東より)



ST21 (東より)



同上 土師質土器出土状況 (南より)

PL. 8



SD30 五輪塔出土状況（南より）



SD31 須恵器出土状況（北より）



SD31 土師質土器出土状況（南より）

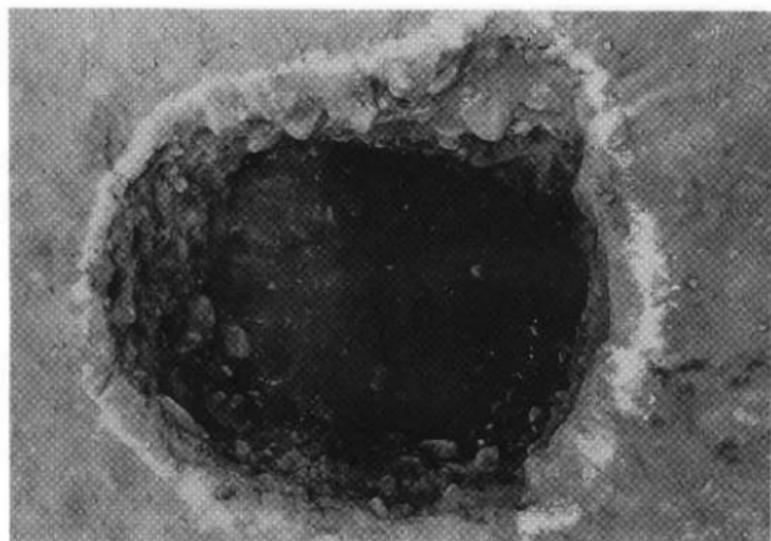


SD36 (北より)

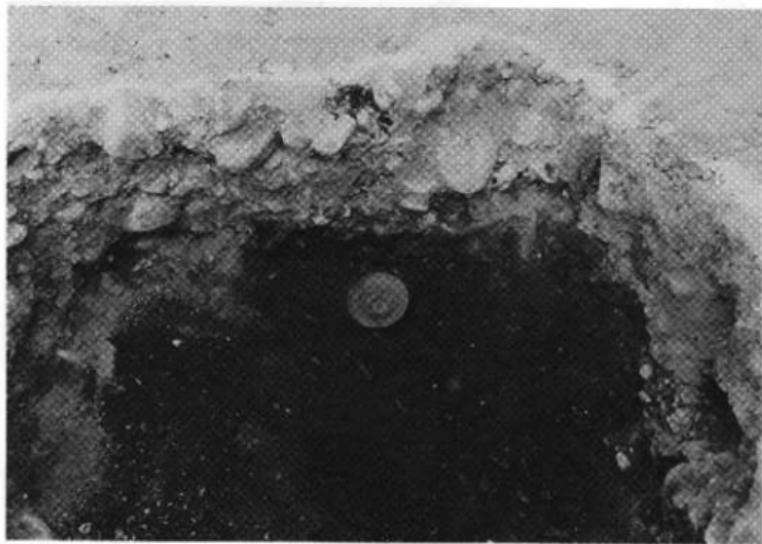
PL.10



（上） SK50 (北より)



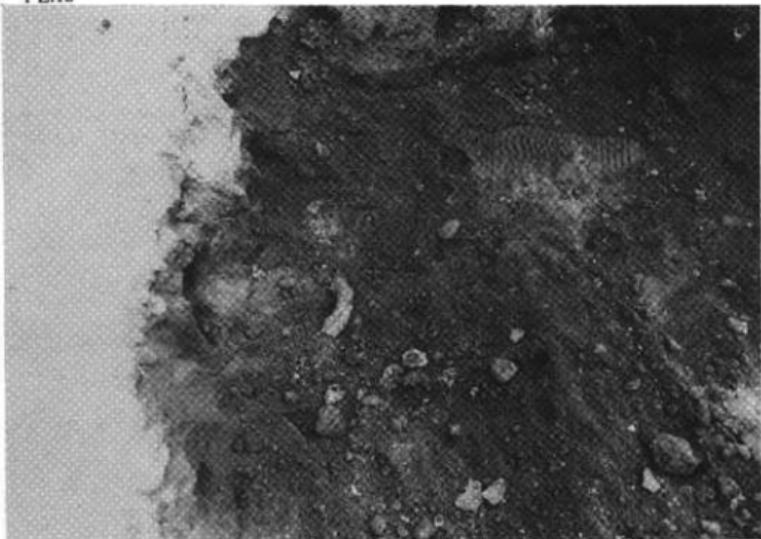
同上 完掘状況 (東より)



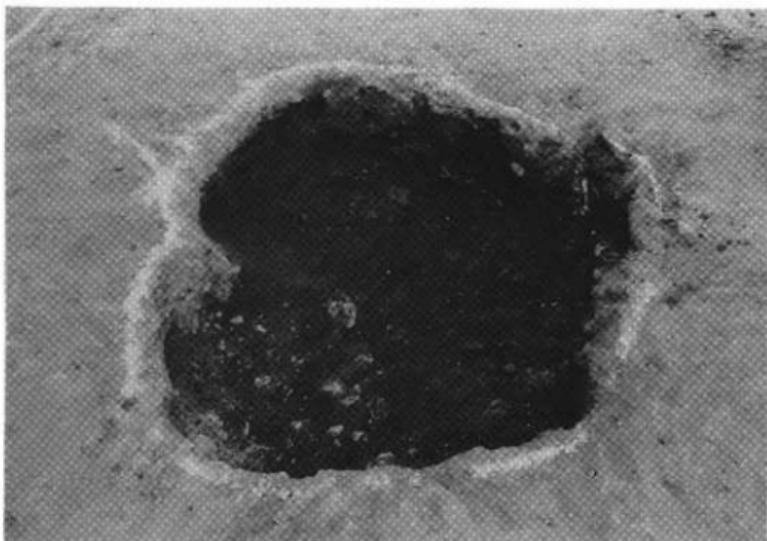
SK50 土師質土器出土状況（東より）



SK51 (北より)



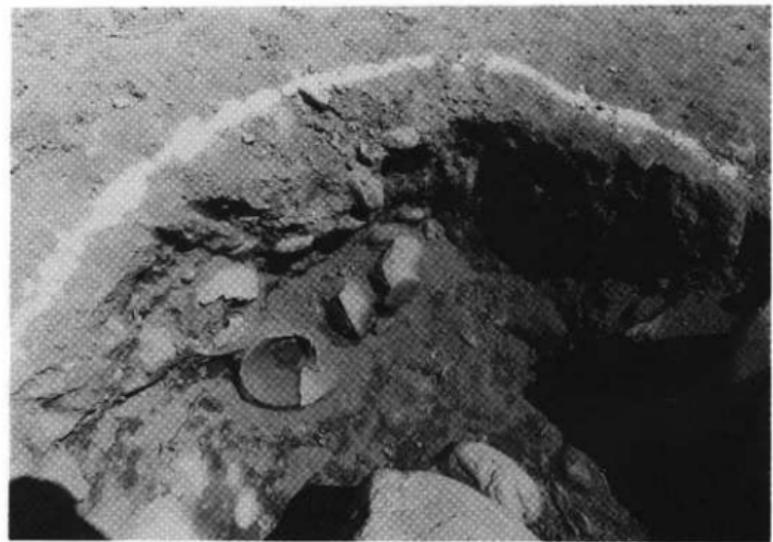
SK51 人骨出土状況（西より）



同上 完掘状況（西より）



SK53 (北より)

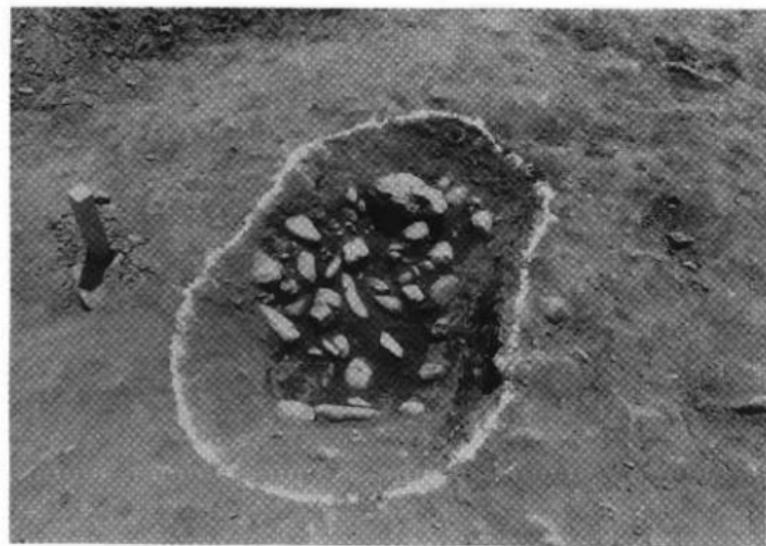


同上 土師質土器出土状況 (北西より)

PL.14



SK55 (東より)



SK56 (北東より)



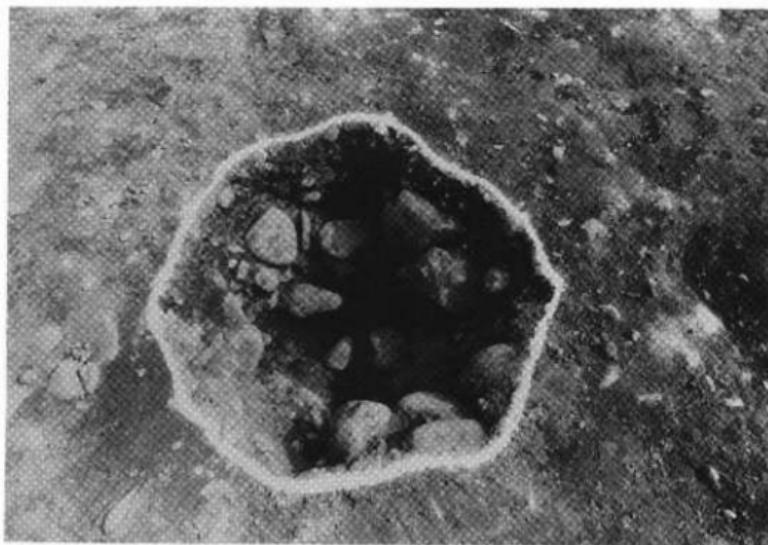
SK57 (西より)



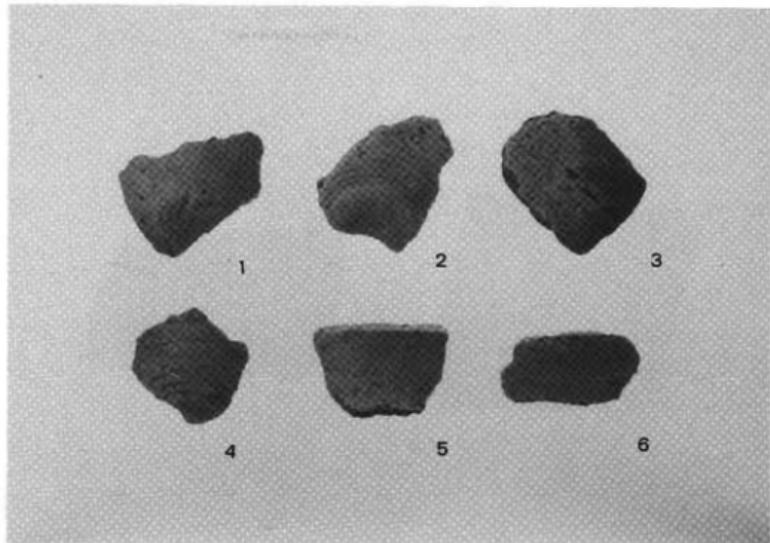
同上 土師質土器出土状況（東より）



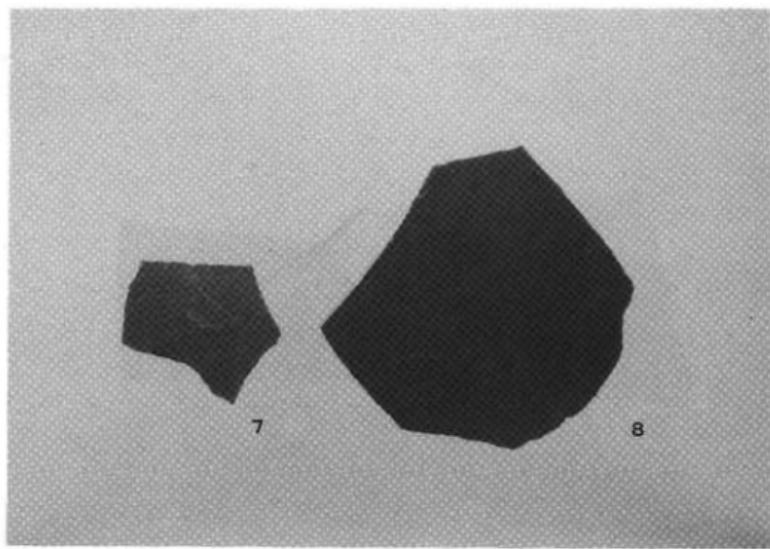
SK57 土師質土器出土状況（東より）



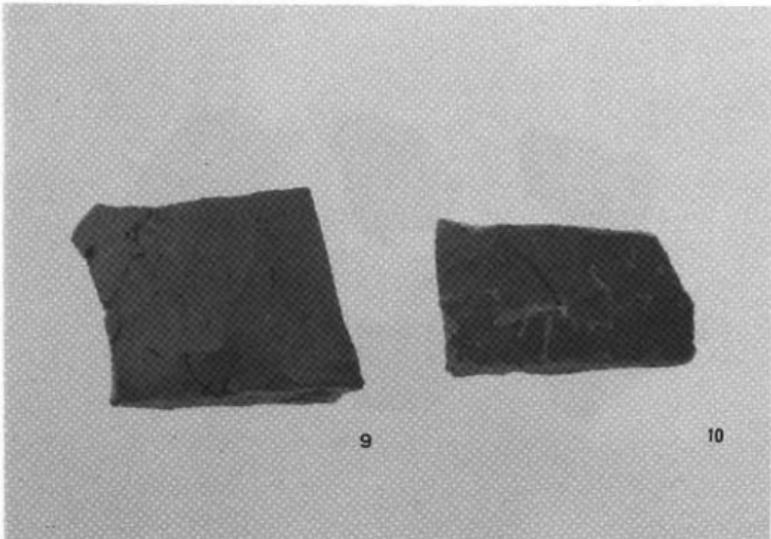
SK60 (北より)



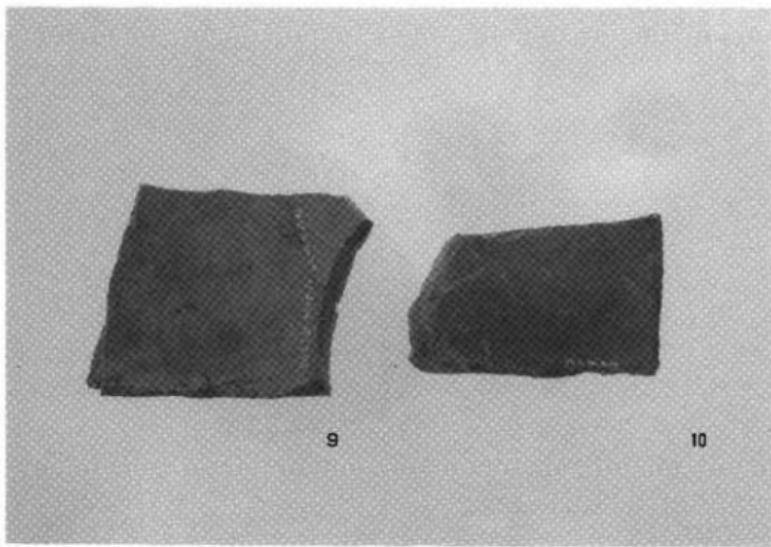
弥生土器



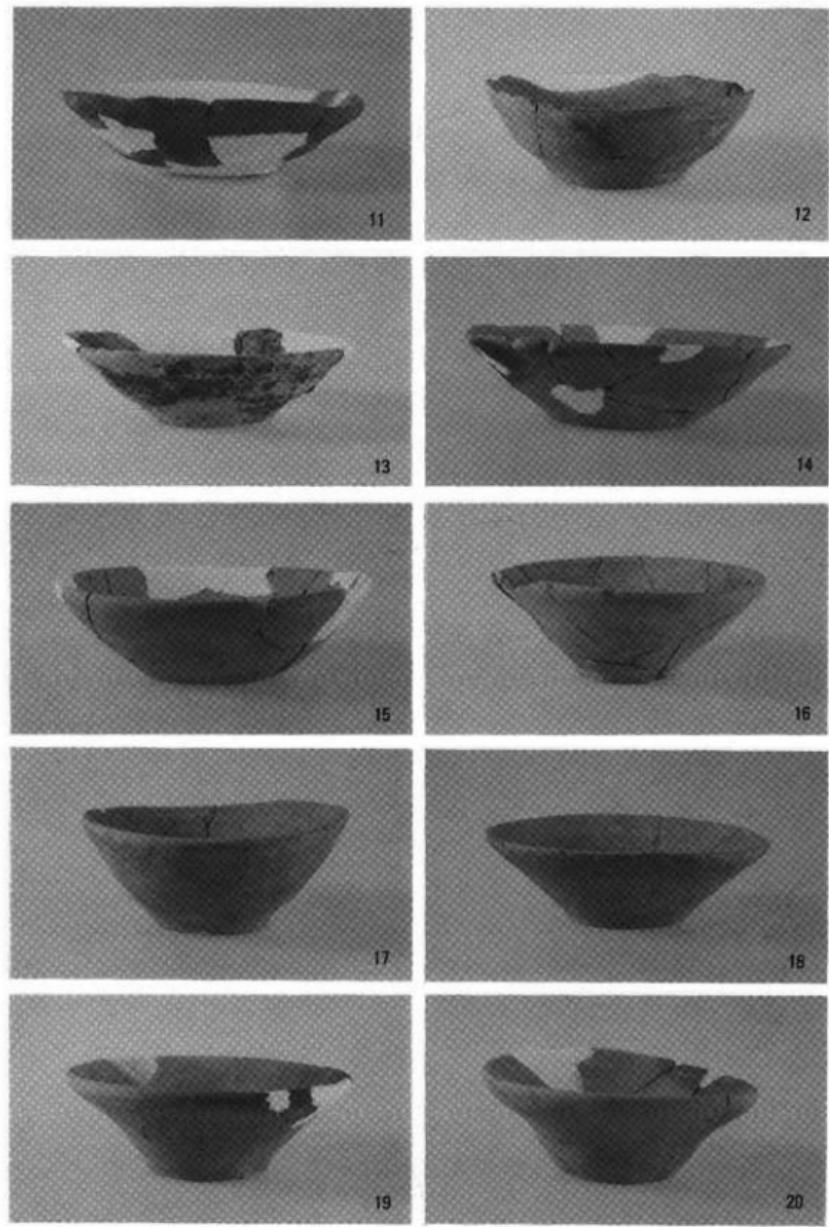
須恵器



円筒埴輪状須恵器(表)



同上(裏)



土師質土器